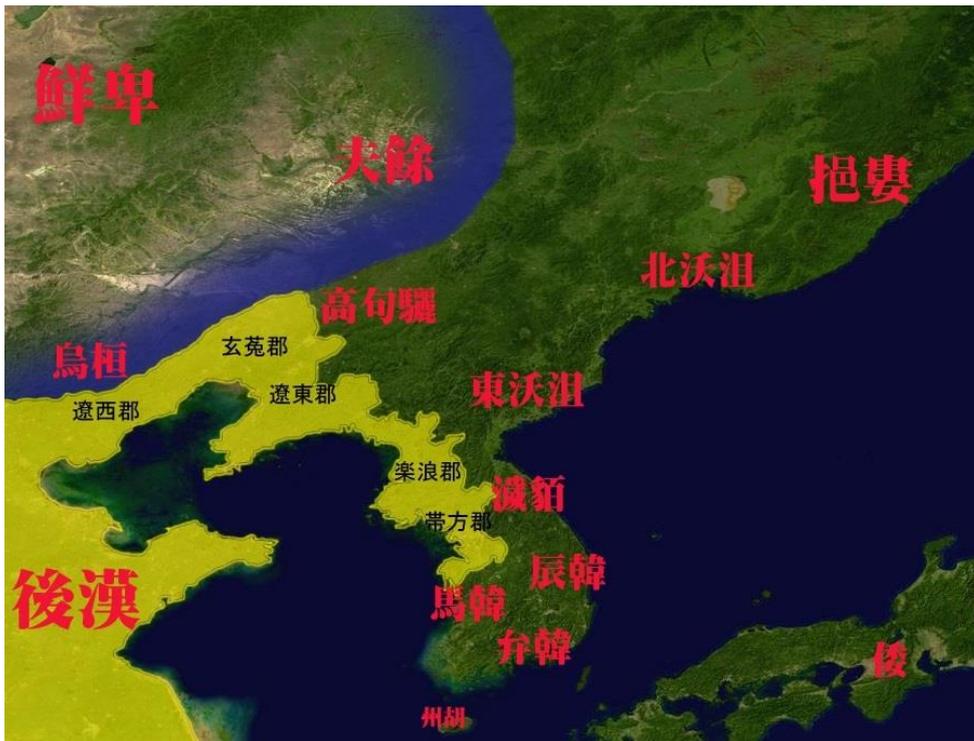


# 正史を訪れる

## Part II 大倭王と倭女王(後漢書と三国志の時代)

### 四章 東アジア概観 (中国と東夷諸国)

森隆一



4

2世紀頃の東夷諸国 (Wiki「東夷」より)

## はじめに

東夷が書かれている列伝は後漢書では東夷伝であるが、三国志では魏書三十烏丸鮮卑東夷伝、晋書では四夷伝のように正式名は書により異なっている。ここではよく知られている東夷伝で呼ぶことにする。

正史の記事で、既に訳があるものや文中での引用などは、引用文の後に(史): 史記、(漢): 漢書、(後漢): 後漢書、(三): 三国志、(晋): 晋書のように簡略に書くことも導入していく。また、訳文のフォントを1段階小さくした。

四夷は中華思想によるものであり、東夷・南蛮・西戎・北狄の総称である。本章では、地形とともに、上に掲げた事項に関し大まかに見ていくことにする。

## 4.1. 中国古代概観

まず、中国の大まかな地勢のうち山脈を見ておこう。この図は、チャイナセブン/基本情報「中国の山脈」より引用したものに幾つかの地名を書き加えたである。



图 4.1 東アジアの山脈

Wiki「黄河」を見ていく。

黄河下流域は、古来よりたびたび氾濫し、大きく流路を変えてきた。古代には現代

の河道に比べてかなり西寄りを流れており、渤海北部の天津付近に河口があったが、紀元前 602 年に記録されている最初の河道変遷が起こり、黄河は旧河道と現代の河道のほぼ中間を流れるようになった。春秋戦国時代は沿岸諸国が堤防を建設したが、この堤防は黄河本流から十分な距離をもって建設されており、氾濫しても堤防内にてある程度吸収することが可能であったため、黄河はやや治まっていた。前漢の時代に入ると、紀元前 132 年に濮陽において黄河が決壊した。この決壊はそれまで知られていた黄河以北の河北平野における氾濫ではなく、黄河の南側で決壊して淮河へと流れ込むものであり、当時の経済中心のひとつであった黄河・淮河間の平野(淮北平野)に甚大な被害をもたらした。この決壊は 23 年後の紀元前 109 年にふさがれたものの、以後黄河は氾濫を繰り返すようになった。

新王朝時代の 11 年にはついに決壊して河道がさらに東へと転じ、現在の河道よりやや北をほぼ現河道と並行するように流れるようになった。この氾濫・決壊は黄河下流域に甚大な被害を与え続けたが、69 年から 70 年にかけて後漢の王景による治水工事が行われ、黄河は安定を取り戻した。

中国文明に大きな影響をもっている黄河を下流から見ていく。まず、山東半島の北側辺りが河口である。河口は何回か変わり、山東半島の南になったこともある。ここから南西に遡り、秦嶺山脈の東側から西に流れる。この辺りに洛陽・開封がある。この先が中流域となる。この次は、呂梁山脈の西側を北に遡る。この曲がり角辺りが三門峡である。ここで、西安か

ら東流してきた渭水と合流する。陰山山脈にぶつかって西に向かい、その  
終わり辺りから南西に遡っていく。

もう1つの大河の揚子江は上海辺りからほぼ西に向かって遡っていく。  
揚子江が表舞台に登場するのは三国時代である。

中国の最初の王朝は殷で次は周であると習ってきた。史記では、三皇五  
帝から夏・殷・周と続いたと書かれているが、遺跡が発見されたのは殷か  
ら後であるということである。これも、最近では夏の遺跡かもしれない遺跡  
が発見されたという記事もあった。また、揚子江には異なる古代文化があ  
ったということも聞く。

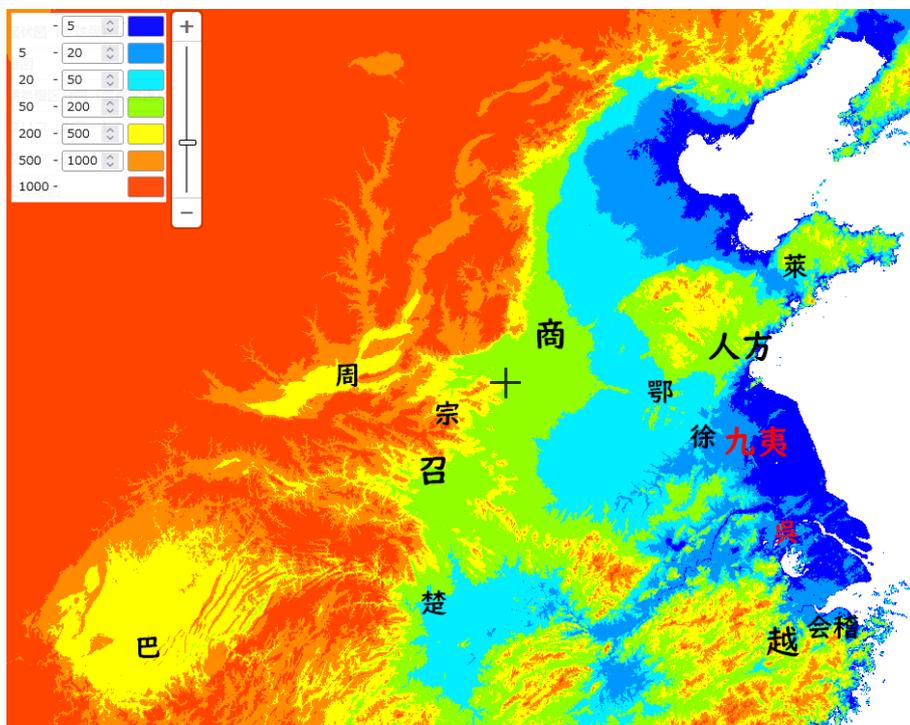


図 4.2 殷の時代 BC1100

殷(商)は太行山脈の南端近くの東側で、洛陽の対岸の少し北、周は黄河が北に曲がるあたりで、西安の対岸の少し北にある。黄河の中流域と平野部の下流域にかけての地域であり、現在の中国の主要部は京から広州を結ぶ地帯であるであり、これらの地域は殷・周の時代には辺境であったと思われる

Wiki「縄文海進」では次のように説明している。

縄文海進は、最終氷期の最寒冷期後(約 19,000 年前)から始まった海水面の上昇を指し、日本など氷床から遠く離れた地域で 100 メートル以上の上昇となり(年速 1 - 2 センチメートル)、ピーク時である約 6,000 年まで上昇が続いた(日本では縄文時代)。現在はピーク時から海水面は約 5 メートル低下した。またピーク時の気候は現在より温暖・湿潤で平均気温が 1-2℃高かった。

表 3.3 四大文明の王朝略年表 から、仰韶文化がピークの 6000 年前を挟む期間で、それ以前に各種の文化が発見されている。

この後の海退の後で農耕が発展したことが殷王朝の成立となったのではないか。さらに農耕が発展することにより、春秋・戦国の分裂状態になったと考える。

殷から周にかけてを扱った小説に封神演義がある。Wikipedia では、封神演義は、中国明代に成立した神怪小説。史実の殷周易姓革命を舞台に、仙人や

道士、妖怪が人界と仙界を二分して大戦争を繰り広げるスケールの大きい作品である。文学作品としての評価は高くないが、中国大衆の宗教文化・民間信仰に大きな影響を与えたとされる。同様に歴史を題材にした三国志演義・隋唐演義に比べても、史実が少ないこともありフィクション部分が圧倒的に多く、幻想性も強い。

周の政治は封建制であると言われている。Wiki「封建制」では、

封建制は、君主の下にいる諸侯たちが土地を領有してその土地の人民を統治する社会・政治制度。諸侯たちは、領有統治権のかわりに君主に対して貢納や軍事奉仕などといった臣従が義務づけられ、領有統治権や臣従義務は一般に世襲される。日本史においては主に、鎌倉時代から江戸時代にかけての「武家の世」の社会・政治制度を表す言葉として用いられている。封建制は、中国古代の統治制度に由来する概念であるとともに、ヨーロッパ中世の社会経済制度であるフューダリズムの訳語でもあり、2つの意味が相互に影響している面もある。

中国では、封建制と郡県制の是非について「歴千百年」の議論が続いた。

日本では中国古典とともに封建制の概念も持ち込まれ、頼山陽など江戸時代の知識人は、鎌倉幕府成立以来の武家政権体制を中国古代と似たものと考え、封建制の概念を用いて日本史を論じた。明治維新で実施された版籍奉還や廃藩置県には、こうした頼山陽らの封建制についての議論が影響している。

ヨーロッパ特にドイツでは、中世を特徴づける社会経済制度としてフューダリズム (Feudalismus) やレーエン (Lehen) が盛んに研究されていた。明治時代半ばにレーエンを中心にフューダリズムが日本に紹介されると、フューダリズムと封建制は

類似しているとされ、フューダリズムの訳語として封建制が用いられるようになった。

**寄り道** 封建時代は停滞の時代や閉ざされた時代のようにいわれている。ヨーロッパの中世は大きな歴史的イベントは少なく、政治史的には停滞していたのかもしれない。3地方では細部は異なるであろうが、各国は自国の繁栄のために努めたはずである。これは、富が地方に保存されることになる。

日本の地方の名産・郷土料理のうち、この江戸時代に形成されたものは少なくないと思っている。ヨーロッパの古い都市の多くはこの時代に領主の居城として築かれた。大司教も封建領主であったことは興味深い。教会のネットワークを通じての情報の流通が為されたのではないかと思う。

印度は地方政権であっても、封建的ではなく、それ以前の段階(部族国家の並立)ではなかったかと思っている。

朝鮮半島の状況は李氏朝鮮の体制がどうであったかであるが、Wiki「李氏朝鮮」を見てみると、律令制のようである。Wiki「律令」からは、新羅律令は唐の律令と同じという説と、独自律令という説がある。ベトナムも似た状況のようである。

封建制の後群雄割拠の時代から絶対王政の時代となる。封建時代に築かれた base を基に、さらに発展し、現代に続いている。

中国では、戦国時代の後秦帝国ができ、この体制が清まで続いた。

日本では、鎌倉時代と江戸時代では似ている面と異なる面が見られる。主従契約という面からは、鎌倉時代のほうがヨーロッパの封建制に近いような気がする。

朝鮮にはこのような封建制と群雄割拠の時代がなかった。日本の律令政治が完成した時期に、朝鮮にも同じような政治形態ができた。朝鮮のほうが早かったかもしれない。日本は鎌倉時代以降形骸化していったが、朝鮮では、大韓帝国成立まで続いた。封建制の欠如は地方の自立と妨げとなったのではないか。

周の時代は西周と東周に分けられ、後者は春秋時代と戦国時代に分かれる。この間、黄河下流域が発展し、中国の主体となる。あるいは中国が成立したといってもいいかもしれない。春秋時代には孔子が現れた。

戦国時代は面白い時代であり、日本の戦国時代と似ているところがあるが、日本の戦国時代は日本という国家が出来上がった後の出来事であるが、中国の場合は中華帝国ができる途上である。この時代にその後の中国の基盤となる思想ができ、領域も黄河下流域にまで広がった。我々が聞く中国故事にはこの時代のものも数多くある。

Wikipedia「諸子百家」では

諸侯やその家臣が争っていくなかで、富国強兵をはかるためのさまざまな政策が必要とされた。それに答えるべく下克上の風潮の中で、下級の士や庶民の中にも知識を身につけて諸侯に政策を提案するような遊説家が登場した。諸侯はそれらの人士を食客としてもてなし、その意見を取り入れた。さらに諸侯の中には齊の威王のように今日の大学のようなものを整備して、学者たちに学問の場を提供するものもあった。

とある。この時代に中国を代表する建造物である長城が造られた。騎馬戦法による北狄に対して、歩兵による集団戦法の中国の各国が対抗するには有効であったはずである。このような巨大建造物を造ることが出来るほど発展したということも言える。

Wiki「万里の長城」では

戦国時代には外敵に備えるために戦国七雄のすべての国々が長城を建設していた。北方の敵に備えるためのものだけではなく、齊や韓、魏や楚のように北方遊牧民族と接していない国も、特に警戒すべき国境に長城を作っていた。そのなかで、北の異民族に備えるために北の国境に長城の建設を行っていたのは燕、趙、秦の3ヶ国であった。

とある。

戦国時代は秦による統一で終了した。東夷に関しては、秦の時代に遼東郡が設置された程度である。

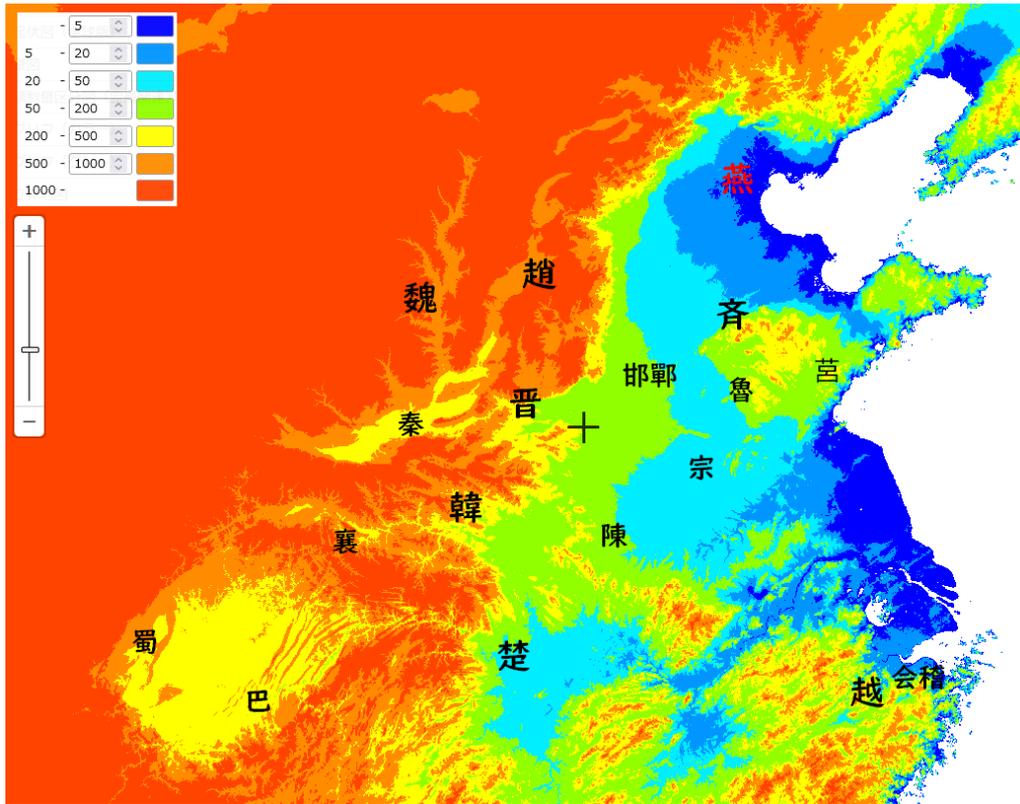


図 4.3 周の時代 BC400

中国の王朝のイメージは皇帝がいて、領土を直接統治できる官僚組織があり、周辺の国々に服従を求め、従わないものには軍を派遣し討つといったところであろうか。各統一王朝の最盛期は。このイメージ通りであったと思われるが、それ以外は外夷を討つだけの力はなかった。逆に、北方の外夷の侵攻に悩まされるようになっていった。

殷と周の時代は上で述べた中国とは言えないのではないかと。周は部族連合のような気がする。全国を統治する官僚組織は無かったのではないかと考えている。秦王朝はこのような王朝で最初のものである。この体制は、

南北朝と五代十国の分裂時代を除き、清まで続いていた。

表 4.1 中国の王朝と正史

王朝名	書名
黄河(長江・遼河) 文明	
夏・殷	
西周 BC1046-BC771	
東周 BC771-BC221	
春秋 BC403 戦国	
秦 BC221-BC201	1 史記 司馬遷 BC91
前漢 BC206-8	2 漢書 班固 90?
新 8-23	
後漢 25-220	3 後漢書 范曄432
魏 220-265	
三国 220-265 呉222-280	4 三国志 陳寿 280+
蜀221-263	
西晋 265-317	5 晋書 房玄齡等 648
十六国 304-439   東晋 317-420	上
北魏 386-534	10 魏書 魏収 554
宋 420-479	6 宋書 沈約 513-
齊 479-502	7 南齊書 蕭子顯 537-
東魏 534-550	
西魏 535-556	8 梁書 姚思廉 629
梁 502-557	
北齊 550-577	11 北齊書 李百薬 636
北周 556-581	12 周書 令狐德棻等 636
陳 557-589	9 陳書 姚思廉 636
	15 北史 李延寿 659
	14 南史 李延寿 659
隋 581-618	13 隋書 魏徵等 636
唐 618-690, 705-907	16 旧唐書 劉昫等 945
	17 新唐書: 欧陽脩・宋祁 1060

上の表は唐までの中国の王朝と対応する正史(作(編)者と製作年)を表にしたものである。

王朝の滅亡年と編者の没年の差が 30 年以内のものは、三国志は魏の滅亡から 15 年、魏書 20 年、陳書 18 年で、宋書 34 年はこれに次ぐものである。

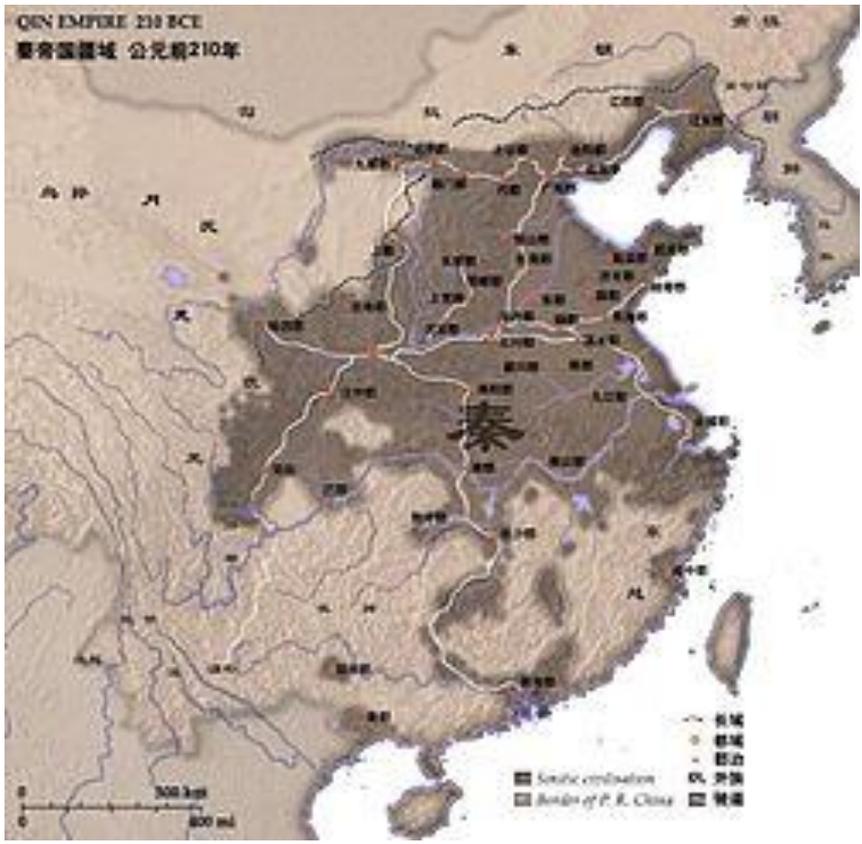


図 4.4 秦帝国の版図 BC210 年 (Wikipedia「秦」)

図 4.4 は Wikipedia「秦」のものである。東胡が書かれているので、引用した。肅慎と朝鮮はあった可能性が高いがわからない。朝鮮の上に高句麗、下に馬韓が書かれている。衛氏朝鮮ができたのが BC200 年頃であるので、高句麗・馬韓は BC210 年にはなかったと思われる。

秦とともに匈奴も勢力を強めたようである。Wikipedia「匈奴」では、紀元前 215 年、秦の始皇帝は將軍の蒙恬に匈奴を討伐させ、河南の地(オルドス地方)を占領して匈奴を駆逐するとともに、長城を修築して北方騎馬民族の侵入を防いだ。

と書かれている。BC200 年頃に匈奴は冒頓単于が登場すると、月氏と東胡を滅ぼした。月氏は西に敗走し、最終的にはガンダーラに国を建てた。東胡の生き残りで烏桓山に逃れた勢力は烏桓となり、鮮卑山に逃れた勢力は鮮卑となった。更に東に逃げ延びた勢力がいたとしたら面白いのだが何も資料がない。

秦の次の王朝は漢である。武帝 BC141-BC87 は BC100 年頃に衛氏朝鮮を滅ぼし、朝鮮四郡を設置した。真番郡と臨屯郡はすぐに廃止されたが、楽浪郡は 313 年に高句麗により滅ぼされるまで続いた。また、張騫を西域に派遣した。

8-23 年の間の新を経て、23 年に光武帝により(後)漢が再興され、220 年まで続いた。桓靈の間の桓帝 146-167 と靈帝 167-189 はこの王朝の皇帝である。後漢が衰退したとき、遼東太守の公孫度は自立を強め、楽浪郡を支配し、その南部に帯方郡 204-313 を置いた。

後漢の次は三国志演義よく知られている魏・呉・蜀の三国時代 220-265

である。それぞれに国の書があるが、東夷伝のあるのは魏書である。魏書の倭人条は他の正史の倭条と比べて情報が多い。女王国への道程が書かれているのは他にはないことである。

三国志演義で描かれているように、魏は呉・蜀と戦っていた。このとき、背面の高句麗の存在は直接的の脅威はなかったかもしれないが、かなりの問題であったと考えられる。もともと、高句麗は遼東郡に対する侵略は絶えず試みていた。また、匈奴などの北狄の側面となる。さらに、その背面の東夷の状況もかなりの関心事であったはずである。

三国は司馬氏により統一され晋 265-317, 317-420 となった。本紀には東夷〇〇国と百済の朝貢が書かれ、東夷伝には馬韓が書かれている。313年に楽浪郡と帯方郡が滅びた。この後の朝貢は直接王朝の都へ行くことになる。

この後は南北朝の時代になる。境界は黄河と揚子江の間で、山東と共に、勢力によりわかれていた。始めの王朝は北朝では北魏 386-534 で、南朝では宋 420-479 であった。

倭条は南朝系の史書にあるが、北朝系の史書にはない。倭は南朝に朝貢し、北朝には朝貢していなかったと考える。これは興味あることである。

晋書の次の宋書には倭の五王が書かれている。南齊書にのみ加羅条がある。また、梁書の高句麗の王統は一番詳しいものである。南朝の正史にこのような記録が残っていたのは興味あることである。なお、南朝の位置は、北を攻略できた時以外は、ほぼ三国時代の呉の領域である。

北魏は仏教の伝播に関して大きな役割を果たしている。魏書にある高句麗と百済への仏伝は早く、これにない倭と新羅への仏伝は遅れたことはこのせいかもしれない。

Wikipedia「南北朝時代（中国）」の初めの部分を引用する。

南北朝時代は、北魏が華北を統一した 439 年から始まり、隋が中国を再び統一する 589 年まで、中国の南北に王朝が並立していた時期を指す。

この時期、華南には宋、齊、梁、陳の 4 つの王朝が興亡した。こちらを南朝と呼ぶ。同じく建康(建業、南京)に都をおいた三国時代の呉、東晋と南朝の 4 つの王朝(宋・齊・梁・陳)をあわせて六朝と呼び、この時代を六朝時代とも呼ぶ。この時期、江南の開発が一挙に進み、後の隋や唐の時代、江南は中国全体の経済基盤となった。南朝では政治的な混乱とは対照的に文学や仏教が隆盛をきわめ、六朝文化と呼ばれる貴族文化が栄えて、陶淵明や王羲之などが活躍した。

また華北では、鮮卑拓跋部の建てた北魏が五胡十六国時代の戦乱を収め、北方遊牧民の部族制を解体し、貴族制に基づく中国的国家に脱皮しつつあった。北魏は六鎮の乱を経て、534 年に東魏、西魏に分裂した。東魏は 550 年に西魏は 556 年にそれぞれ

北齊、北周に取って代わられた。577年、北周は北齊を滅ぼして再び華北を統一する。その後、581年に隋の楊堅が北周の譲りを受けて帝位についた。589年、隋は南朝の陳を滅ぼし、中国を再統一した。

Wikipedia「六朝」では

六朝時代は、中国における宗教の時代であり、六朝文化はこの時代に興隆した宗教を基に花開いた。一方では、後漢代に盛行した神秘的傾向の濃厚な讖緯の説・陰陽五行説の流れの延長上に位置づけられる。また、後漢末より三国に始まる動乱と社会の激変に伴う精神文化の動揺が、従来の儒教的な聖人を超越した原理を求める力となったものと考えられる。

儒教では、魏の王弼が、五行説や讖緯説を排した立場で、經書に対する注を撰した。それと同時に、老莊思想の影響を受けた解釈を易經に施したことで、その後の晋および南朝に受け入れられることとなった。その一方で、北朝では、後漢代の鄭玄の解釈が踏襲され、經学の南北差を生じさせるに至った。

魏晋の貴族社会は、清談が尊重された時代であり、王弼や何晏が無為の思想に基づいた清談を行い、それが正始の音として持て囃された。次いで、竹林の七賢が、思想的・文学的な実践によって、それを更に推進した。その後、郭象が老莊の思想(玄学)を大成した。

仏教の伝来は、後漢代のこととされる。但し、伝来当初は、外来の宗教として受容され、なかなか浸透しなかった。六朝代になると、後漢以来の神秘的傾向が維持さ

れ、老莊思想が盛行し、清談が仏教教理をも取り込む形で受け入れられたことから、深く漢民族の間にも受容されるに至った。そこで重要な役割を果たしたのは、仏図澄・釈道安であり、道安は鳩摩羅什の長安への招致を進言し、その仏教は門弟子である廬山の慧遠の教団に継承された。慧遠は沙門不敬王者論を著して、覇者の桓玄に対抗した。

道教は、後漢代の五斗米道に始まる。その教団が三国の魏によって制圧されると、一時、その系統は表には現われなくなるが、4世紀初頭に、葛洪が現われ、抱朴子を著わして不老不死を説く道教の教理体系を整備した。この時代の道教信徒として知られるのは、書聖の王羲之である。その系統は、南朝梁の時代の陶弘景に受け継がれ、茅山派(上清派)道教の教団が形成された。一方、北朝では、寇謙之の新天師道が開創され、やはりその制度面での整備が、仏教教理も吸収する形で行なわれた。

秦以降の中国の王朝は300年程で滅亡している。統一王朝による支配と、その滅亡における分裂状態を繰り返して来た。分断状態の大きいものは、秦の前の春秋・戦国時代、晋の滅亡後の五胡十六国・南北朝の時代と、唐滅亡後の五代十国の時代である。面白いのは、文化的にはこの分裂状態のほうが充実していると思われることである。現在我々が用いている中国由来の文化の多くは、この時代と南北朝の時代に生まれたか発展したものと考えている。

**寄り道** 中央集権国家は、もともと、全国の富を収奪する組織と考える。黄河の治水のために王朝が発展したと聞いたことがある。中国の場合、周辺諸民族の侵略を防ぐほうが大きいと考える。城砦を攻めるには、敵の2から3倍の兵力が必要とされている。逆に言えば城を維持するには、敵の1/2から1/3の兵力が必要ということになる。防御のための幾つかの支城を維持するには相当の兵力を必要とした。中国王朝に侵略できたのは北狄と呼ばれる北方遊牧民族である。古代で最強のものは匈奴であった。匈奴に勝ったのは漢の武帝の時代である。戦国時代は遊牧民も強大でなく、現在の省規模の燕でほぼ防げていたようだ。

巨大帝国を維持するためには、

A:個人や集団のできる自衛組織を圧倒する軍事力、

B:命令を伝える仕組み、

C:税を徴収し中央に運ぶ仕組み

の3つは重要であろう。Aは王朝の成立時から備わっている。通信技術が未発達な時代は、BとCはほぼ同じ組織でできた。

統一王朝では、その市場の大きさから、巨大商人が出現する。また、外敵に備えるための軍隊は、外敵の圧力が低い時には、余剰兵力となる。このような商人と王朝の軍事力が一体となって大きくなっていったのかもしれない。軍需物資の安定供給には商人の存在が不可欠であったと考えら

れる。政商と官僚の癒着で政治が行われる。帝紀の何処か(おそらく後漢の)で、錢5万貫で侯になったとあった。

人民解放軍は共産党の中国支配のための存在と言われている。国家成立のために倒す敵が外部ではなく国内に居たということによるのではないか。最近では昔からの業務である外敵の防御と周辺国家への侵略も思い出したように始めたようである。ただし、中国としては、周辺国家と想っていないかもしれない。中華帝国の冊封体制にあった国は全て領内とする発想である。

冷戦中の2超大国は Union of Soviet Socialist Republics と United States of America であった。共に連邦国家であった。両者と異なる点を考えると、商業(金融資本)が発達しているかいないかあろうか。この意味では、現在の中国は産軍連邦国家(王朝)と言えるのかもしれない。

コトバンク「連邦」知恵蔵の解説では

複数の政治単位(共和国、自治共和国、州など)が連邦憲法などによって法的・政治的に結合し、対内的には各単位が自治権と独自の統治構造を維持しながら、対外的には統一国家を形成する状態、あるいは、そのような国家形態。スイス、ベルギー、ロシア、米国、カナダ、マレーシアなどが例。連邦政府は外交、軍事、通貨などの権限を持ち、各単位は独自に憲法、議会、行政府、裁判所などを持ち、教育や福祉を管轄するケースが多いが、両者の権力分配は憲法や政治構造などによって異なる。

日本大百科全書(ニッポニカ)の解説では

国家結合の一種で、連邦の組成国間の結合度が緊密になり、連邦自体が国家となり国際法上の能力をもつに至ったもの。連邦の組成国(支分国)は、独自の自治的存在であり、ときに限られた範囲で連邦の憲法によって、一定の国際法上の能力を認められることもある。一般に国際人格をもつのは連邦であり、連邦の内部関係は国内法関係である。連邦の組成国がどの程度の権能をもつかは、連邦の憲法で定められる。単一国家の地方自治体に近いもの(ドイツ、オーストリア、スイスなど)から、旧ソビエト連邦の構成共和国のように、国際機構に加入し、条約締結権を認められるものもある。連邦の実例としては、1787年以後のアメリカ合衆国、1848年以後のスイス連邦、ドイツ連邦共和国、旧ソビエト連邦共和国のほか、アルゼンチン、ブラジル、メキシコ、オーストラリア、オーストリア、カナダ、インド、ミャンマー、ナイジェリア、アラブ首長国連邦など多くの例がある。1990年代にはベルギーとエチオピアが連邦国家となっている。

The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland が例に挙げられていない。構成国が王国でなくなったことで条件を充たさなくなったというわけか。

中国に連邦制が可能か。連邦制では内政用と対外用を分ける効果がある。どちらが低コストか。

## 4.2. 四夷と燕

Wikipedia「東夷」の始めには

本来は古代中国の東に位置する山東省あたりの人々に対する呼び名であったが、秦以降は朝鮮半島、日本列島などに住む異民族を指すようになった。  
とある。

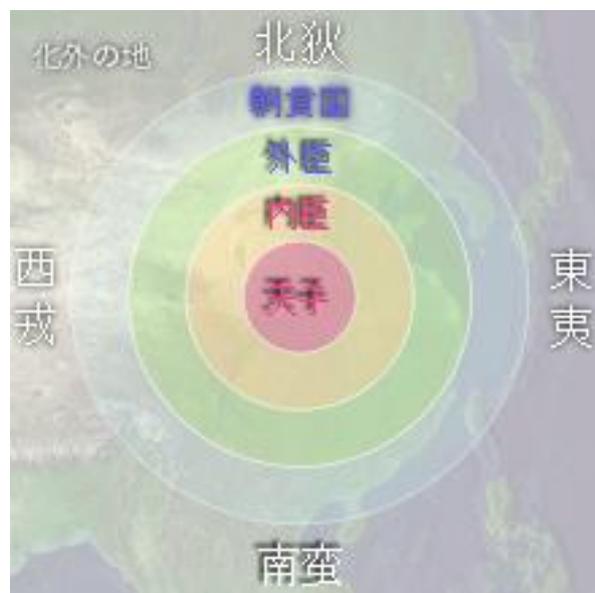


図 4.5 中華の階層

Wikipedia「中華思想」では

戦国末期の荀子は儒家の理想国家である商や周の華夷秩序について、中原の王者が治めた地を中心に、畿内、畿外、侯、衛、蛮、夷、戎、狄の順に500里ごとの距離をとった同心円状の構造であり、遠近に応じてそれぞれにふさわしい制度で帰服したと説明した

と書かれている。ここに、上の図 4.5 中華の階層が載っていた。この図では、中央の小円に天子の文字があり、その外に 3 つの同心円が描かれ、円環じょうのところに順に天子・内臣・外臣・朝貢国と書かれている。さらに、大きい円の外側に、東夷・南蛮・西戎・北狄が書かれている。

記事に書かれている階層、畿内・畿外・候・衛・蛮・夷・戎・狄、と図 4.5 に書かれている階層、天子・内臣・外臣・朝貢国・東夷・南蛮・西戎・北狄、について考えてみる。前者を記事の階層後者を図の階層と呼ぶことにする。

両者とも後半に四夷が置かれているが、記事では‘畿内・畿外・候・衛・蛮・夷・戎・狄の順に 500 里ごとの距離をとった同心円状の構造’と書かれているが、図では並列となっている。また、蛮・夷の順が逆になっている。四夷が同心円状というのは筆者のイメージとは異なっている。これから、記事のほうが古いと考えている。四夷に順を付けるとすれば、中国の王朝((夏・)殷・周)とであった順ということしか思いつかない。

Wikipedia「夏（三代）」考古学的比定・実在性には

夏が存在したとされる年代の遺跡としては、宮殿を持つ都市文化である河南省偃師県翟鎮二里頭村で発見された二里頭遺跡が、炭素 14 年代測定法により、殷の建国(二里岡文化)に先行していることが確定しており、また後から力を伸ばした殷は、この二里頭文化を征服して建国し、文化を継承した形跡が見られる。したがって、こ

れが史書に伝わる夏に相当すると考える学者も存在する

と書かれている。また、Wikipedia「二里頭遺跡」では

二里頭遺跡は、中国の河南省洛陽市偃師区翟鎮二里頭村で発見された新石器時代末期から青銅器時代にかけての都市・宮殿遺跡である。1988年に全国重点文物保护单位に指定された。

と書かれている。

夏は洛陽付近にあったようだ。黄河の南ということと、黄河の治水に苦労したということから、夏王朝は南を向いていたと思われる。敢えて地名を推定すれば、揚子江の南の呉・越が夏王朝時代の南蛮ではなかったと思う。南に関しては越南という用語があり、ベトナムのことである、

Wikipedia「ベトナム」概要には

現代中国の南東岸に住む百越という諸民族が南下し、現代のベトナムに遷移してベトナムの先祖になって、原始的だが小規模な国家群を形成していた。漢・唐の時代には中国の侵略を抵抗できず、中国からの直接支配を受けたが、10世紀には独立した。

と書かれている。

夷に関しては、図 4.2 で、山東半島の下の子い部分に九夷と書かれている。ベトナムの概要と同じとすれば、九夷が東に遷移して、東夷となっ

たということになる。遷移の時期は、図 4.2 の BC1100 年と図 4.3 の BC400 年の間になる。一方、この期間内に日本では弥生時代に入っている。

夷で検索をしていると、次がヒットした。コトバンク「夷」である。夷の訓はエビスであった。エビス様である。改訂新版 世界大百科事典「夷」の意味・わかりやすい解説では、

七福神の一神として、福德を授ける神とされ、家の台所や茶の間にまつられることが多い。春秋の夷講には、財布にお金を入れて供えるなど商業神としての性格が強いが、農村では、竈神や荒神信仰と習合して、稲の豊作をもたらす田の神の性格をも兼ねる。田植後のサナブリ、刈上祭に稲苗や稲の穂を供える地方もある。漁村では豊漁をもたらす神とされ、海岸や岬などに祠を設けてま、つることが多い。特定の年齢の若者が、海底から小石を拾い上げてきて神体としたり、漁網に入った石などを神体とするなど、海から漂着した物を神体とする地方もある。魚群を追って岸近くにやってきたクジラ・サメ・イルカなどを〈えびす神〉として尊敬する風習もあり、クジラの胎児を海岸に埋葬してえびす神としてまつたという伝承がある。海から川に遡上するサケを捕るときに、〈エビス〉と声をかけながら殺すという伝承も秋田県などにある。また、漂流する水死体を拾うと、豊漁に恵まれるといった伝承があって、流れ仏をえびす様と呼ぶこともあった。

と書かれている。なんとなく、太公望・大国主命とイメージが重なってくる。

西戎に関しては殆ど知識がない。図 4.3 で周と書かれているのは西安辺りである。位置的にはこの辺りに西戎がいたとしてもおかしくない。西安(長安)の西にある烏鞘嶺(武威(涼州))から(敦煌)玉門関に至る地域は河西回廊と呼ばれている。黄河が西安の東で北進した後南下し、西に転じた辺りから始まる。

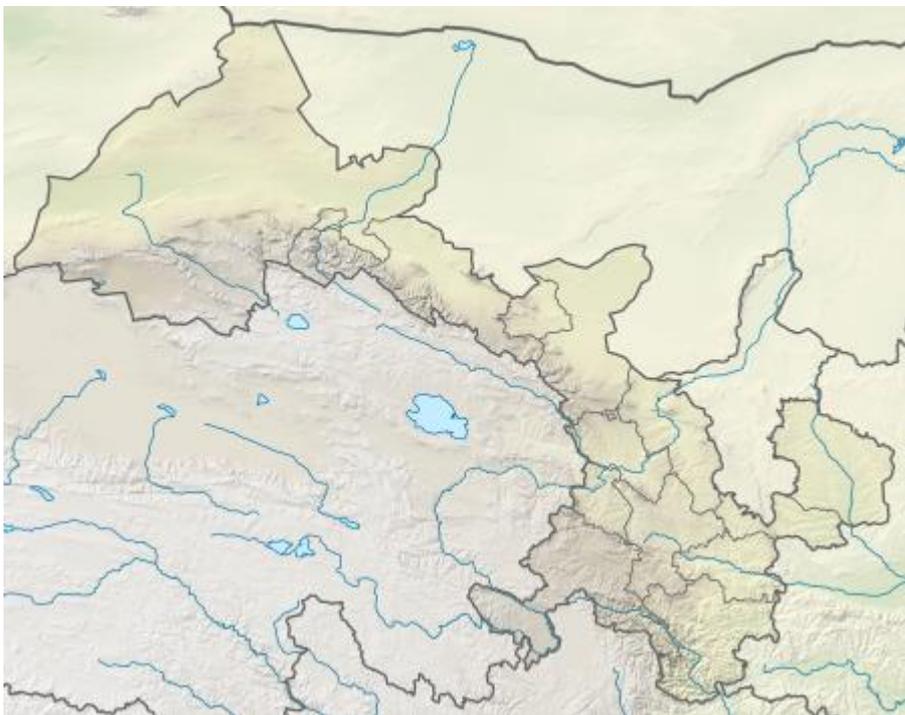


図 4.6 河西回廊 (Wikipedia 河西回廊 から)

周は西戎を配下にする事によえい勢力をととのえたのではないか、晋により西戎は中華帝国に組み込まれたのではないか、と思われる。

西安郊外には兵馬俑がある。ここには胡人もいるということを読んだ気がする。コトバンク「胡人」改訂新版 世界大百科事典「胡人」の意味・

わかりやすい解説では、

中国、秦・漢ではもっぱら匈奴をさし、シルクロードの往来が盛んになると西域の諸民族を西胡または単に胡と呼び、唐では広く塞外民族をあらわす一方で、特に多くイラン人をさした。深目高鼻・青眼多鬚の胡賈・胡商は西方の文物や慣習をもたらして中国文化の世界化に多大の役割をはたし、それは日本にも及んだ。早く後漢の靈帝は胡服、胡帳、胡床、胡座、胡飲、胡箜篌、胡笛、胡舞を好み、都下の貴族もそれにならった。こうした胡風趣味は唐代で著しく流行した。

と書かれている。

北狄としては匈奴が有名である。漢王朝としては創設以来の主な敵であった。匈奴は前漢の武帝により滅ぼされた。このとき、活躍したのが衛青・霍去病将軍であった。

Wikipedia「燕（春秋）」では

燕(紀元前 1100 年頃-紀元前 222 年)は、中国に周代・春秋時代・戦国時代にわたって存在した国。春秋十二列国の一つ、また戦国七雄の一つ。河北省北部、現在の北京を中心とする土地を支配した。首都は薊で、現在の北京にあたる。燕都・薊城の遺蹟は北京市房山区に所在する。

燕の始祖は周建国の元勳である召公奭である。しかし周代初期の燕についてはわからないことが多い。姫姓の伯爵であった。河南の南燕国に対して北燕ともいう。当

時は燕ではなく匱と書いていた(本項では以下「燕」と書く)。召公の一族ははじめ、山東半島の奄(魯の近隣)に封じられたが、成王の時(禄父の乱の鎮圧後?)、現在の北京近辺に移った。このため国名を燕といった(奄=匱=燕、すべてエンと読む)。またこの時、現地にあった韓侯国が入れ替わりに現在の陝西省に移った。燕に残った韓の旧住民は多く韓氏を名乗った。西周時代、燕の東方(現在の遼寧省朝陽市カラチン左翼モンゴル族自治県)に箕侯という都市国家があり、燕の属国であったが、春秋時代を待たずに北方遊牧民に滅ぼされ、燕に亡命した住民が多かったらしい。春秋時代以降、燕の士大夫層に韓や箕を氏とする者がみられる。

朝鮮史との関係：紀元前195年、燕太子丹の成員の一員あるいは遼東の豪族とみられる燕人の衛満は、盧縮に従わずに古朝鮮に亡命し、朝鮮の歴史上最初の国家である衛氏朝鮮を建国した。北朝鮮の大寧江長城は、北朝鮮では高麗時代の築造と主張するが、閻忠は、その遺物相などから、燕の長城とみている。これらの地域には、燕の遺物および秦・漢の遺物を含む遺構がみられるのが、特徴であり、朝鮮への燕の進出がうかがわれる。

日本史との関係：山海経海内北経に、蓋国在鉅燕南倭北 倭属燕 という一節がある。蓋国の位置について述べた文であるが、蓋国についてはいろいろな説があるため、ここでいう倭の位置については確定しない。また‘属する’の意味も、普通に倭は燕の属国だったという一般的な解釈と、十二分野説での燕分に属するの意味とする説とがある。いずれにしろ、山海経の中でも海内北経は紀元前後の成立と推定されており、倭に関する最古の記録の一つであることに違いはない。

と書かれている。

匈奴の前の北狄には、東胡と月氏があり、両者を滅ぼすことにより、匈奴は強大になった。匈奴以降の思いつく対外抗争を挙げてみる。

まずは、漢の武帝は匈奴討伐後に衛氏朝鮮を滅ぼした。

隋の煬帝による高句麗遠征は成功しなかった。これは、598年と612年・613年・614年の4回行われた。

唐は外征してもおかしくないと思われるが、大きなものの記憶がない。これは、唐が強大過ぎることと、唐は周辺の民族出身者の登用を行うなど、侵略しなくても唐の恩恵が得られたのではないか。さらに、クシャナ朝がパンジャブにあり、この二国間の隊商貿易に従事するほうが侵略より良かったということdと思う。

蒙古による元の成立。越南遠征。朝鮮征討と日本遠征。

明はイメージとしては唐に近い。鄭和による東南アジア遠征は船団によるもので中国唯一のものである。習近平が明を再興すると言ったのはこれをふまえたものかもしれない。南は明北は唐の版図は中国の旧領と思っているのだろうか。

満州の清による征服。

イギリスとの阿片戦争。

林則徐

朝鮮半島をめぐる日清戦争。 李鴻章

ロシアの満州進出はどのようにして行われたか。万里の長城はロシアの中国進出にも歯止めになっていたかもしれない。

人民解放軍と蒋介石の抗争(功争)は結果としては中華人民共和国の成立と国民党の台湾への敗退で終わった。米ソの代理戦争とも言えないか。

ここで、本稿の立場から、考察してみる。まずは、中国史における大きな分裂抗争の時代を挙げてみる。

戦国時代は紀元前 476 年から紀元前 221 年までの 255 年

三国時代は 184 年から 280 年までの 100 年

五胡十六国は 304 年から 439 年までの 135 年

五代十国は 907 年から 960 年までの 53 年

清朝は辛亥革命により滅亡した。これは、1911 年におき、今から 113 年前である。清朝の凋落は 1839 の年阿片戦争から始まり、1894 年の日清戦争により決定的になった。明治元年は 1868 年で 156 年前である。

このあと、1900 年の義和団事変、1904 年の日露戦争、1932 年の満州国建国、1935 年の冀東防共自治政府の成立などが続き、1949 年の 75 年前に中華人民共和国が成立した。

### 4.3. 東胡と月氏

東胡と月氏を駆逐した匈奴対策は中国の王朝にとっては死活にかかわる重要事項であった。また、このステップ地帯を通して製鉄が伝播したという研究もあり、匈奴時代の製鉄遺跡が発掘されたとの報告もある。(IRON ROAD・和鉄の道「[古代世界の鉄生産](#)」) 騎馬戦術とともに鉄製の武器も匈奴の強勢の原因であったかもしれない。

正史の関連する列伝を見るべきであるが、現在その余力はない。匈奴は直接の戦闘があり、列伝だけではなく、帝紀も見る必要がある。ここでは、東胡と月氏に関し、Wikipediaの記事からの抜き取りに留める。

Wikipedia「月氏」には

月氏は紀元前3世紀から1世紀ごろにかけて東アジア、中央アジアに存在した遊牧民族とその国家名。紀元前2世紀に匈奴に敗れてからは中央アジアに移動し、大月氏と呼ばれるようになる。大月氏時代は東西交易で栄えた。

秦の始皇帝の時代、中国の北方では東胡と月氏が強盛であった。一方、匈奴は東胡や月氏の間接支配を受けていたが、東胡を滅ぼし、月氏を敗走させ、次いで南の楼煩、白羊河南王を併合し、漢楚内戦中の中国にも侵入し、瞬く間に大帝国を築いた。

また、Wiki「東胡」では

東胡は中国の春秋戦国時代から秦代にかけて内モンゴル東部—満州西部に住んで

いた遊牧民族で、匈奴により滅ばされ、烏桓山に逃れた勢力は烏桓となり、鮮卑山に逃れた勢力は鮮卑となった。

と書かれている。三国志では烏桓鮮卑東夷伝とあるように、烏桓・鮮卑は東夷には属さない。この後の鮮卑の東への移動が倭国大乱の遠因となったと考えている。

Wikipedia「烏桓」では、

建武 25 年 49、烏丸の大人郝旦ら 9000 余人が部下を引き連れて漢の朝廷にやってきた。その主だった指揮者が王や侯に封ぜられ、その数は 80 人以上にものぼった。彼らを長城の内側に居住させ、遼東属国、遼西、右北平、漁陽、広陽、上谷、代郡、雁門、太原、朔方の諸郡に分けて住ませ、同じ烏丸族の者たちを内地に移るよう招き寄せた。彼らに衣食を給し、護烏丸校尉の官を置いてその統治と保護にあたらせた。こうした施策の結果、烏丸は漢のために塞外の偵察と警備の任にあたり、匈奴や鮮卑に攻撃を加えるようになった。

と書かれている。さらに、

Wiki「鮮卑」では

殤帝の延平元年 106、鮮卑は東への移動を始め、長城の中に入って漁陽太守の張頭を殺した。安帝 107-125 の時代、鮮卑の大人の燕荔陽が入朝した。朝廷は彼に鮮卑王の印綬を授けた。これ以後、鮮卑は、あるときは反抗し、あるときは降伏し、ある

ときは匈奴や烏丸と争った。順帝の時代、再び長城の内部に侵入し、代郡の太守を殺した。漢と烏丸に敗れた結果、鮮卑の3万余落は、遼東郡の役所に降服を申し入れてきた。桓帝の時代、投鹿侯の子、檀石槐が大人の位に就くと、高柳の北、300余里の弾汗山、噉仇水のほとりにその本拠を置いた。その兵馬は勢い盛んで、南は漢の国境地帯で略奪を働き、北では丁令の南下を阻み、東では夫余を撃退させ、西では烏孫に攻撃をかけた。かつての匈奴の版図をまるまる我が物とし、東西は1万2000余里、南北は7000余里にわたって、広大な地域をすっぽり手中に収めた。霊帝の時代になると、彼らは幽州、并州の2州で盛んに略奪を行い、国境地帯の諸郡は、鮮卑から酷い損害を受けない年はなかった。

と書かれている。

フン族の移動がゲルマン民族の大移動を誘発したように、鮮卑族の移動が扶余系民族の移動を誘発し、東夷に影響を与えたのではないか。桓霊間の倭国大乱の遠因になったのではないかと想っている。

次の大月氏の話は遊牧系の民族の国家形成に関し示唆に富むものである。

Wiki「月氏」の大月氏では

その後も敦煌付近にいた月氏であったが、漢の孝文帝の時代に匈奴老上单于配下の右賢王の征討に遭い、月氏王が殺され、その頭蓋骨は盃(髑髏杯)にされた。王が殺された月氏は二手に分かれ、ひとつがイシク湖周辺へ逃れて大月氏となり、もうひとつ

つが南山羌(現在の青海省)に留まって小月氏となった。

イシク湖周辺に逃れていた(大)月氏は、もともとそこにいた塞族の王を駆逐してその地に居座った。しかし、老上单于 BC174-BC161 年の命により、烏孫の昆莫が攻めてきたため、大月氏はまた西へ逃れ、最終的に中央アジアのソグディアナ(粟特)に落ち着いた。そこでアム川の南にあるトハリスタン(大夏)を征服し、その地に和墨城の休密翁侯、雙靡城の雙靡翁侯、護澡城の貴霜翁侯、薄茅城の肸頓翁侯、高附城の高附翁侯の五翁侯を置いた。

一方、前漢では武帝の時代に張騫を使者とした使節団を西域に派遣した。張騫は匈奴に捕われるなどして 10 年以上かけ、西域の大宛、康居を経て、ようやく大月氏国にたどり着いた。この時の大月氏王はかつて匈奴に殺された先代王の夫人で、女王であった。大月氏女王は張騫の要件を聞いたが、すでに復讐の心は無く、国家は安泰しており、漢が遠い国であるため、同盟を組むことはなかった。

このクシャーナ朝は仏教の発展で重要である。仏像はこの王朝が支配していたガンダーラで初めて造られた。

政体的には、`五翁侯を置いた`ということが気になる。高句麗の五族を連想させる。部族連合から始まり、それらと 100 年を超える抗争から、1つの部族で父子継承が行われていき、クシャーナ朝になったということである。

高句麗は新の時代には東に逃走させられる程の攻略を受けたように、中

国の圧力があり、内部抗争の余裕がなかったと考えられる。あるいは、内部抗争も玄菟郡の介入があり、短期に決着がついたのかもしれない。

壁画古墳などで高句麗との類似性が言われている倭でも同様なことが起きたのではないかということが言えるのか言えないのか。また、女王がいたことも注目される。高句麗・百済にはいなかったが、倭・新羅では複数の女王がいた。他に女王が目立つ国はイギリスである。どこで見たか記憶がないが、(中国北方)遊牧民では、夫人が王となることがあるということである。

東胡の一部にはさらに東に逃げて、扶余となったのは妄想に近いものだが話としては面白い。これは、‘世界の村で発見こんなところに日本人’の中で、“キルギスでは日本人と同祖との伝承がある。肉好きの人はキルギス人に、魚好きの人は日本人になった”という言い伝えが語られていた。匈奴に滅ぼされた時、西へ逃げた人がいたとしても不自然ではない。

東夷で、女王のいたのは、新羅・倭(日本)のみである。大月氏でも、匈奴に殺された先代王の夫人が女王となったのは面白いことである。

## 4.4. 東夷諸国

唐書までの東夷伝に、朝貢が記されている東夷の国々を表にする。

表 4.2 正史に現れる東夷と朝貢

	後漢書	三国志	晋書	宋書	南齊書	梁書	魏書	周書	隋書	南史	北史	旧唐書	新唐書
扶余	○	○	○										
邑婁	○	○											
肅慎			○										
勿吉							○				○		
裨離			○										
東沃沮	○	○											
北沃沮	○												
靺鞨									○				
濊	○	○											
高句驪	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
馬韓	○	○	○										
辰韓	○	○	○										
弁辰	○	○	○										
百濟			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
新羅						○			○	○	○	○	○
加羅					○								
倭	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○
日本												○	○
扶桑						○				○			
流求									○		○		
	10	9	8	3	4	5	3	2	6	5	6	5	5

この他に晋書本紀に東夷○○国の朝貢記事がある。

東夷伝が初めて書かれている後漢書の東夷伝では、

“秦が六国を併合した時、其淮や泗夷は散り散りとなり民のみとなった。

陳涉が蜂起し、天下が崩壊した。燕人の衛満は朝鮮に逃れ、そこで王となった。100年ばかり後、武帝が朝鮮を滅ぼしたとき、東夷が初めて都に詣でた。王莽が王位を篡奪した時、貊人が辺境を侵した。光武帝の建国の初めに、また朝貢してきた。この時、遼東太守の祭彤は北方を威圧した。このときより、濊貊倭韓は遠路朝獻するようになった。”

秦併六國 其淮 泗夷皆散為民戸 陳涉起兵 天下崩潰 燕人衛満避地朝鮮 因王其國  
百有餘歲 武帝滅之 于是東夷始通上京 王莽篡位 貊人寇邊 建武之初 復 來朝貢 時  
遼東太守祭彤威誓北方 聲行海錶 于是濊貊倭韓 萬里 朝獻  
と書かれている。

Weblio「陳勝」では

陳勝?-BC209 は、秦代末期の反乱指導者。字は涉。劉邦や項羽に先んじて秦に対する反乱を起こしたが、秦の討伐軍に攻められて敗死した。字は涉。  
と書かれている。なお、漢書列傳第一が陳勝項籍傳である。

北狄と比べて東夷は殆ど直接の脅威とはならなかった。中国の王朝が東夷と直接接したのは、漢の武帝による衛満の征討が最初である。この後、漢・三国・南北朝の時代では、高句麗が中国の圧力が弱くなった時に、遼東郡を侵略した程度である。

中国王朝が直接戦った東夷は、隋・唐での高句麗、唐の時代の百濟・倭、

鎌倉時代の元寇、秀吉の朝鮮出兵、および、日清戦争である。アメリカ合衆国も東の国であるから、東夷といえなくもない。

**寄り道** 朝鮮戦争を、中国王朝が他国と朝鮮半島で行った戦争と拡大解釈すれば、数回の朝鮮戦争が起きたことになる。

**白村江：（第1次朝鮮戦争）** 高句麗が唐に滅ぼされた後は、百済と新羅の戦いが始まるのは自然の勢いである。新羅のほうが優勢で、劣勢の百済が日本に援助を求めた。ここで、新羅が唐に援助を求め、唐と日本が応援で参戦した。

白村江での敗戦 663 により、日本は朝鮮半島から完全に撤退することになった。

**文禄・慶長の役：（第2次朝鮮戦争）** 朝鮮における李朝に反する勢力・日本(秀吉)と李氏朝鮮・明の戦い。進攻の速度から朝鮮側に協力者(道案内、情報提供)が居たと思われる。翻ってみれば、秀吉に朝鮮攻略を想いつかせるには、朝鮮側からの働きかけがあったと思われる。

**日清戦争：（第3次朝鮮戦争）** 朝鮮をめぐって日本と清による戦争。路線を巡る李朝内部の抗争に日本と中国が介入した。

**朝鮮戦争：（第4次朝鮮戦争・無印朝鮮戦争）** 1950年に起きたものである。

次の図は、表紙の地図の国名を地勢図に写したものが次図である。

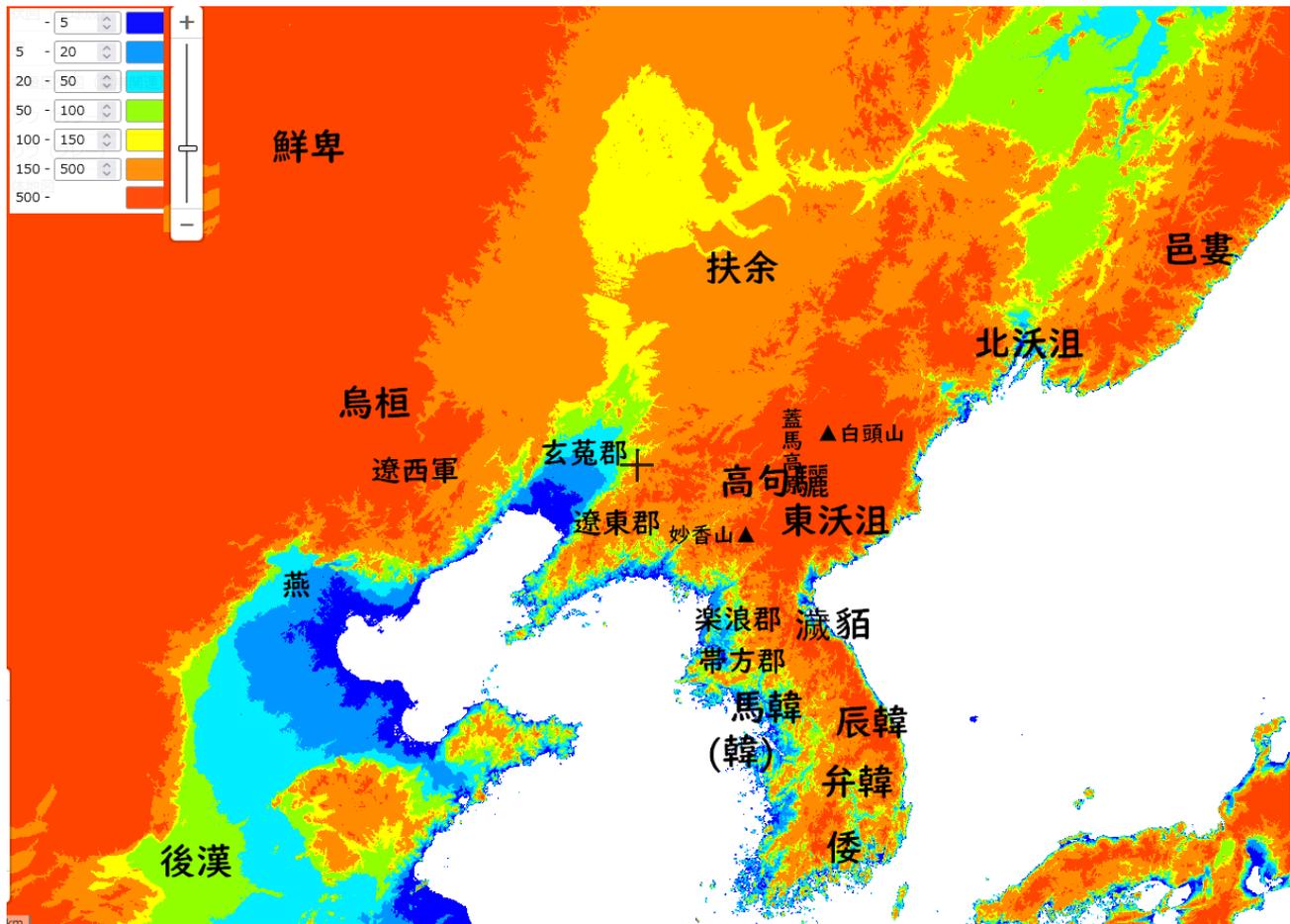


図 4.7 2世紀の東夷

扶余の位置は、もう少し南かもしれない。

東夷伝では、扶余・濊・小水貊・沃沮・肅慎挹婁・勿吉・靺鞨などの国も書かれている。これらの国々は日本の古代史に直接の関与は殆どない。扶余に関しては正史の記事もある程度あり興味あるが、文章の難しい風俗の記事も読む必要があり、踏み込めないでいる。ここでは、Wikipedia の

記事の抜粋引用と正史の記事から概略をつかむことを目標とする。興味ある記事で、訳しきれない記事も引用していくが、実際には、今後の考察のためのメモである。

**扶余** に関する記事を見ていく。

Wikipedia「夫余」建国以前では

夫余が建国する以前のこの地には濊族が住んでいたと思われ、松花江上流の弱水（奄利大水、現拉林河）を渡河南進して夫余を建国する以前の慶華古城（濊城、前漢初期には存在、黒龍江省賓県）も発見されている。

後漢書では、

“夫余国は玄菟郡の北 1000 里に在り、南は高句麗と、東は挹婁と、西は鮮卑とそれぞれ接する。北には弱水がある。2000 里四方で、本は濊の地である。”

夫餘国 在玄菟北千里

南与高句驪 東与挹婁 西与鮮卑接 北有弱水 地方二千里 本濊地也（後漢）

（次の記事は、今は訳せない。引用が必要となるころには、訳せるかもしれない。）

初 北夷索離國王齧行 其待兒于後妊身 王還 欲殺之 侍兒曰 前見天上有氣 大如鷄子 來降我 因以有身 王囚之 後遂生男 王令置于豕牢 豕以口氣噓之 不死 復徙于馬蘭 馬亦如之 王以為神 迺聽母收養 名曰東明 東明長而善射 王忌其猛 復欲殺之 東明奔走 南至掩淲水 以弓擊水 魚鱉皆聚浮水上 東明乘之得度 因至伏餘而王之焉

“官名には六畜を用いている。馬加・牛加・狗加がある。村落はどれかの加に属する。”  
以六畜名官 有馬加 牛加 狗加 其邑落皆主屬諸加

“建武中 25-56 東夷の国々がみな朝貢してきた。” 夷諸國皆來獻見

“建武二十五年 49 夫餘王が使いを派遣し朝貢した。” 夫餘王遣使奉貢

“至安帝永初五年 111 夫余王は 7・8 千人で楽浪郡侵したが、後に復歸した。”  
夫餘王始將步騎七八韃人寇抄樂浪 殺傷吏民 後復歸附

“永寧元年 120 迺は嗣子の尉仇台を派遣し朝貢した。帝は尉仇台に印綬金綵を与えた。”  
迺遣嗣子尉仇台詣闕貢獻 天子賜尉仇台印綬金綵

“順帝永和元年 136 その王は京に朝貢した。” 其王來朝京師

“桓帝延熹四年 161 使いを派遣し年賀の朝貢をした。” 遣使朝賀貢獻

“永康元年 167 王の夫台は二萬餘人で玄菟郡を寇した。玄菟郡の太守の公孫はこれを撃破し、千余人の首級をあげた。”

王夫台將二萬餘人寇玄菟 玄菟太守公孫域撃破之 斬首韃餘級

“至靈帝熹平三年 174 また朝貢してきた。” 復奉章貢獻

三国志では

“夫余は長城の北で、玄菟郡から 1000 里のところにある。南は高句麗、北は挹婁、西は鮮卑と接する。北には弱水がある。”

夫餘在長城之北 去玄菟千里 南與高句麗 東與挹婁 西與鮮卑接 北有弱水

“国には君王がいる。六畜を官名にあてている。馬加・牛加・猪加・狗加・

大使・大使者・使者がある。村落には豪民がいて、皆を下戸とよび、奴僕としている。諸加の別主は四方に出ている。”

國有君王 皆以六畜名官 有馬加 牛加 豬加 狗加 大使 大使者 使者 邑落有豪民  
名下戸皆爲奴僕 諸加別主四出

“夫餘はもともと玄菟郡に帰属していた。公孫度が海東に勢力を上げたとき、夫餘王の尉仇台は遼東郡に帰属した。このとき、句麗と鮮卑は強大であった。度は夫餘を二国の間においた。宗女を娶った。”

夫餘本屬玄菟 漢末 公孫度雄張 海東 威服外夷 夫餘王尉仇台更屬遼東 時句麗  
鮮卑強 度以夫餘在二虜之間 妻以宗女

“尉仇台が死に、簡位居が立った。簡位居は適子がなく、孽子の麻餘がいた。諸加は麻餘を共立した。”

尉仇台死 簡位居立 無適子 有孽子麻餘 位居死 諸加共立麻餘 牛加兄子名位居  
爲大使 輕財善施 國人附之 歲歲使詣京都貢獻

“正始中 240-249 幽州刺史の母丘句麗を討つことを検討した。玄菟郡の太守王頎を夫餘に派遣した。位居は大加を郊外に遣わし、軍糧を供した。”

幽州刺史母丘儉討句麗 遣玄菟太守王頎詣夫餘 位居遣大加郊迎 供軍糧

“麻餘が死に、其子で六歳の依慮が王となった。”

麻餘死 其子依慮年六歲 立以爲王

“その印には濊王之印と書かれていた。国には濊城と呼ばれている故城があった。ここはもと濊貊の地で、夫餘王はその中で、自ら亡人と謂った。”

其印文言 濊王之印 國有故城名濊城 蓋本濊貊之地 而夫餘王其中 自謂亡人

夫余の王は

迺 → 尉仇台（夫台） → 簡位居 → （孽子）麻餘 → 依慮

孽子：妾腹の子、庶子、親不孝な子

と継がれている。

百済王の姓が餘であること、中華人民共和国吉林省松原市に扶余市があること、大韓民国忠清南道に扶餘郡があることを指摘しておく。

濊 に関する記事を見ていく。

Wikipedia「ワイ人」では

濊は、三国志やなどに記されている古代民族。現在の黒龍江省西部・吉林省西部・遼寧省東部から朝鮮半島北東部にかけて、北西～南東に伸びる帯状に存在したとされる。濊貊は、古代の韓国・北朝鮮の種族名で朝鮮半島北部と中国の東北部に住んでいた韓国・北朝鮮の根幹となる民族の一つを見ている。しかし、まだ様々な見解が示されている。

“濊は北は高句麗・沃沮と、南は辰韓と接する。東は大海で西は楽浪郡に至る。濊と沃沮と高句麗は元の朝鮮の地である 濊北與高句麗 沃沮

南與辰韓接 東窮大海 西至樂浪 濊及沃沮 句驪本皆朝鮮之地也（後漢）

“昔、(周の)武王が箕子を朝鮮に封じたとき、箕子は礼儀・田・蚕を教え、八條之教をつくった。・・・その後、四十世の朝鮮侯準のときに至り、王を自称した。漢の初めに大乱がおき、燕 齊 趙の人で避地に逃れるものが数万になった。ここで、燕人の衛満は準を撃破し朝鮮の王となった。その後孫の右渠が王となった。”

昔武王封箕子于朝鮮 箕子教以禮義田蠶 又製八條之教 ・・・ 其後四十世至朝鮮侯準自稱王 漢初大亂 燕 齊 趙人往避地者數萬口 而燕人衛滿擊破準 而自王朝鮮 傳國至孫右渠（後漢）

“元朔元年 BC128 濊君の南閭らは右渠に叛き、二十八万人を率いて遼東に詣で内属した。武帝は其の地を蒼海郡とした。”

濊君南閭等畔右渠 率二十八萬口詣遼東内屬 武帝以其地為蒼海郡(後漢)

“至元封三年 BC108 に朝鮮を滅ぼし、樂浪・臨屯・玄菟・真番の四郡を置いた。”

滅分置樂浪 臨屯 玄菟 真番四郡（後漢）

“昭帝始元五年 BC82 臨屯郡・真番郡を樂浪郡か玄菟郡に併合した。また玄菟郡は高句麗を従えている。單單大領の東の沃沮・濊貊は樂浪郡か玄菟郡に属する。”

罷臨屯 真番 以 併樂浪 玄菟 玄菟復 徙居句驪 自

單單大領已東沃沮 濊貊悉屬樂浪玄菟(後漢)

“後に、広く遠いため、領東七縣を分け樂浪郡東部都尉を置いた。”

後以境土廣遠 復分領東七縣 置樂浪東部都尉（後漢）

“建武六年 30 都尉官を廃し、領東の地を棄て、そこの渠帥を縣侯に封じた。皆は歳時に朝賀している”

省都尉官 遂棄領東地 悉封其渠帥為縣侯 皆歳時朝賀（後漢）

“大君長はない。官には侯と邑君や三老がある。老人は高句麗と同種であるという。言語法俗は凡そ同じである。”

無大君長 其官有侯 邑君 三老 耆舊自謂與句驪同種 言語法俗大抵相類（後漢）

Weblio 辞書「三老」では、中国、漢代に県や郷に置かれた郷官の一。父老中の有徳者として、その地方の住民の教化をつかさどった。

“單單大山領の西は樂浪郡に属する。領東七縣に都尉をおき、濊の民をおさめた。

自單單大山領以西屬樂浪 自領以東七縣 都尉主之 皆以濊爲民 後省都尉封其渠帥爲侯 今不耐濊皆其種也 漢末更屬句麗（三）

**小水貂** に関する記事は次のみである。

“高句麗は貂ともいう。別種があり、小水の畔に住んでいる。これにより小水貂という。弓を好む。いわゆる貂弓である。”

句驪一名貂 有別種 依小水為居 因名曰小水貂 齣好弓 所謂貂弓是也（後漢）

**沃沮** に関する記事を見ていく。

Wiki「沃沮」では、

沃沮は、紀元前 2 世紀から 3 世紀にかけて朝鮮半島北部の日本海に沿った地方（現在の咸鏡道付近）に住んでいたと思われる民族。三国志や後漢書では東沃沮と表記される。

三国志では、北東は狭く西南に広い、高句麗の蓋馬大山（長白山脈）の東から海岸までに及び、北にユウ婁・夫餘と、南に濊貊と接し、その言語は高句麗と大体同じで時に少し異なると記される。

沃沮という独自の国家があったのではなく、前漢の玄菟郡の夫租県（現在の咸鏡南道の咸興市付近）にいた濊貊系種族を指すものと考えられており、同じく濊から分かれた夫余・東濊や高句麗とは同系とされている。

“東沃沮は高句麗の蓋馬大山の東にあり、大海に沿っている。その地形は東北が狭く西南が長く凡そ千里四方である。”

東沃沮在高句麗蓋馬大山之東 東濱大海 北與挹婁 夫餘 南與濊貊接其地東西夾南北長 可摺方輻漚（後漢）

“東沃沮は高句麗の蓋馬大山の東にあり、大海に沿っている。その地形は東北が狭く西南が長く千里程である。北は挹婁・夫餘、南は濊貊と接する。”

東沃沮在高句麗蓋馬大山之東 濱大海而居 其地形東北狹 西南長 可千里 北與挹婁 夫餘 南與濊貊接（三）

“その言葉は句麗とほとんど同じであるが、時々異なる。”

其言語與句麗大同，時時小異（三）

“毋丘儉が句麗を打ったとき、句麗王宮は沃沮に逃げた。軍を進めこれを撃ち、沃沮の邑落の皆を破った。斬り獲った首級は三千余りであった。宮は北沃沮に逃げた。北沃沮は置溝婁ともいい、南の沃沮まで八百里余りで、風俗は南北同じで、挹婁と接している。”

毋丘儉討句麗 句麗王宮奔沃沮 遂進師擊之 沃沮邑落皆破之 斬獲首虜三千餘級  
宮奔北沃沮 北沃沮一名置溝婁 去南沃沮八百餘里 其俗南北皆同 與挹婁接（三）

挹婁・肅慎 に関する記事を見ていく。

Wikipedia「ユウ婁」では、

挹婁は、後漢から五胡十六国時代（1世紀から4世紀）にかけて、外満州付近に存在したとされる民族。

“挹婁は古の肅慎国である。扶余の東北千里程にあり、大海に沿い、北沃沮と南で接する。その北はしられていない。” 挹婁 古肅慎之國也 在

伏餘東北韃餘渚 東濱大海 南與北沃沮接 不知其北所極（後漢）

“挹婁は夫余の東北千餘里に住む。大海に沿い、北沃沮と南で接する。その北はしられていない。その土地は険しい山が多い。扶余人に似てはいるが、言葉は夫余と異なり、高句麗と同じである。”

挹婁在夫餘東北千餘里 濱大海 南與北沃沮接 未知其北所極 其土地多山險 其人

形似夫餘 言語不與夫餘 句麗同 (三)

“東夷の飲食の類は皆俎豆を用いる。ただ、挹婁は用いていない。法俗は綱紀がない。”  
東夷飲食類皆用俎豆 唯挹婁不 法俗最無綱紀也 (三)

俎と豆。俎はいけにえの肉をのせるまないた、豆は菜を盛るたかつき。  
転じて、礼法。(コトバンク「俎豆」)

“武王の滅紂におよんで、肅慎が獻じてきた。”及武王滅紂，肅慎來獻 (後漢)

“康王の時、肅慎がまた至った。”  
康王之時 肅慎復至 (後漢)

“東夷では、肅慎の貢があった。”  
東夷有肅慎之貢 (三)

“肅慎氏は挹婁ともいい、不鹹山の北に住む。夫餘から六十日の所である。  
東は大海に沿い、西は寇漫汗国と接する。北は弱水である。”

肅慎氏一名挹婁 在不鹹山北 去夫餘可六十日行 東濱大海 西接寇漫汗國 北極弱水 (晋)

不鹹山は白頭山である。(Wikipedia「白頭山」)

弱水はエチナ川の別名で松花江の古称である。(Wikipedia「弱水」)

寇漫汗國を比定しているサイトは見つからなかった。

“周の武王のとき、楛矢・石罍を周の公輔成王に獻じとどけた。また入賀の使いを派遣した。”

周武王時 獻其楛矢 石罍 逮于周公輔成王 復遣使入賀 (晋)

“元康初年 BC65 にまた貢獻してきた。元帝の中興にまた詣でた。”

元帝に中興はなく、大興 318-321 がある。

ここまで諸国の位置は図 4.10 とほぼ同じようである。

## 勿吉

Wikipedia 「勿吉」では

勿吉は、中国の南北朝時代に、高句麗の北から満州地域に住んでいた狩猟民族で、現在の松花江から長白山一帯に居住していたと思われる。肅慎、挹婁の末裔で、唐代における靺鞨の前身である。

## 靺鞨

Wikipedia 「靺鞨」では

靺鞨は、中国の隋唐時代に中国東北部、沿海州に存在した農耕漁労民族。南北朝時代における勿吉の表記が変化したものであり、肅慎、挹婁の末裔である。16 部あったが、後に高句麗遺民と共に渤海国を建国した南の粟末部と、後に女真族となって金朝、清朝を建国した北の黒水部の 2 つが主要な部族であった。

## 4.5. 朝鮮の王朝

唐成立までの朝鮮の王朝を図に示す

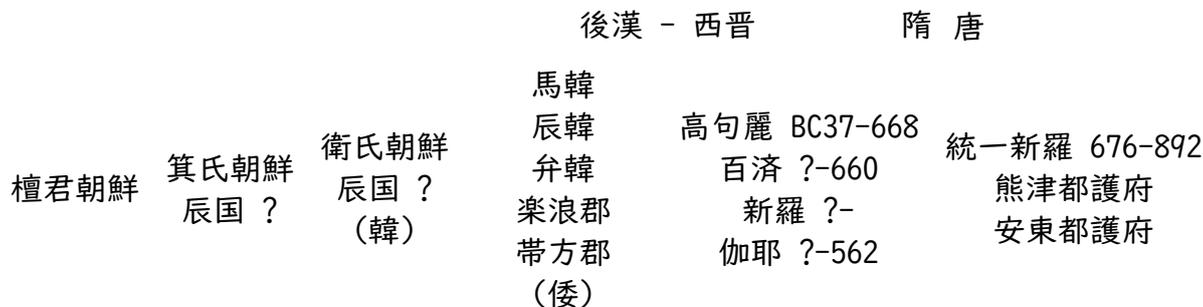


図 4.8 朝鮮の王朝

この表は、Wikipedia「李氏朝鮮」にある表の統一新羅までの王朝の図に若干の部分的変更を加えたものである。この後は分裂、高麗・元の支配・李氏朝鮮・大韓帝国と続く。なお、高句麗が朝鮮を版図に加えるのは、樂浪郡を滅ぼした後である。

漢書地理志の樂浪郡では、県のリストの筆頭が朝鮮県となっているが、武帝の登場までは、遼東郡が最東端の郡であり、その東には、衛氏朝鮮のみが知られていたと考えている。

図 4.7 に挙げられている国で、衛氏朝鮮以降は存在したというのが定説

である。檀君朝鮮は正史の東夷伝には現れない。箕氏朝鮮と辰国はその国の記事はないが、他との関連で名前は現れる。

正史からは箕準が韓王を名乗った以外、韓という国は存在しない。

**寄り路** 日本が朝鮮に傀儡政権をつくるとき、日本では三韓征伐で名は知られていたが、朝鮮では国としては存在していなかった韓を採用して、国名を大韓帝国としたのではないかと想像している。

## 箕氏朝鮮

正史では箕氏朝鮮という国は現れないが、朝鮮王 箕準 は東夷伝に書かれている。これは中国の王朝とは直接の関係がなかったことによるのではないか。

Wikipedia「箕子朝鮮」では、

箕子朝鮮 BC12C-BC194 とは、中国の殷に出自を持つ箕子が建国したとされる朝鮮の伝説的な古代国家。古朝鮮の一つ。首都は王險城(現在の平壤)。三国志魏志東夷伝辰韓条・魏略逸文などに具体的な記述があり、考古学的発見からは、箕の姓を持つ人々が殷朝から周朝にかけて中国北部に住んでおり、殷朝から周朝への時代変化とともに満州、朝鮮へと移住した可能性が指摘されている。と書かれている。また、次の図も掲載されていた。



図 4.9 箕子朝鮮と辰国 (Wikipedia「箕子朝鮮」)

史記 卷三十八 宋微子世家 第八 では

“微子開者 殷帝乙之微子開は殷帝の乙の長子で、帝紂の庶兄である。・・・箕子は紂の親戚である。” 首子而帝紂之庶兄也・・・箕子者 紂親戚也 (史記)  
 に続き、箕子と紂王の話が書かれている。さらに、箕子と周の武王の対話の後、

“武王は箕子を朝鮮に封じた。” 於是武王乃封箕子於朝鮮 (史記)  
 と書かれている。

周の武王は周の創設者で紀元前 1043 年に没した。この時代に朝鮮半島

に王を封じるということは疑わしい。

後漢書では次のように書かれている。

“朝鮮王の箕準が衛満に破れたとき、将と民衆数千人とともに海に逃れ、馬韓を攻め破り、自ら韓王となった。”

朝鮮王準為衛満所破 迺將其餘衆數千人走入海 攻馬韓 破之 自立為韓王（後漢）

次の三国志の記事は後漢書と同様である。

“(朝鮮)侯准は王を僭称していた。燕の亡命者衛満に攻め奪われ、将と宮廷の人と海に逃れ韓に居住し、韓王と自称した。その後絶滅した。今韓の人で祭祀者として奉る者がいる。漢の時には楽浪郡に属し、季節ごとに朝謁した。”

侯准既僭號稱王 為燕亡人衛満所攻奪 將其左右宮人走入海 居韓地 自號韓王 其後絶滅 今韓人猶有奉其祭祀者 漢時屬樂浪郡 四時朝謁(三)

濊条に次の記事が書かれている。

“昔(周の)武王が箕子を朝鮮に封じた。箕氏は礼儀を以て田や蚕を教えた。・・・その後四十代あまりたって、朝鮮侯の准は王を自称した。”

昔(周)武王封箕子于朝鮮 箕子教以礼儀田蚕 ・・・ 其后四十余世 至朝鮮侯准自称王（後漢）

“昔箕子は朝鮮にたどりついた。八條の教えを作りこれを教えた。門戸を閉めることはないが盗みはない。その後 40 世を経て、朝鮮侯准は王を僭

称した。”

昔箕子既適朝鮮 作八條之教以教之

無門戸之閉而民不爲盜 其後四十餘世 朝鮮侯准既僭號稱王 (三)

びんいん 微: wēi、箕: jī、濊: wèi、准: zhǔn

箕准が逃れた先は後漢書では馬韓となっている。この時に馬韓があったことになるのか。これは、後漢書成立時に馬韓と呼ばれた地としておく。また、辰王はどう関わるのか。

箕准は朝鮮侯とあり、これは中国の(周)王朝から認められたものと思われる。侯は県規模の首長に与えられる爵位である。

図 4.9 を見ていると、濊が朝鮮半島の南部にあり、その北に東濊、沃沮を隔てて濊貊がある。まるで箕氏朝鮮を取り囲んでいるようである。これから、濊がいるところに箕氏朝鮮が造られたのではと思われる。濊貊の位置は後に高句麗が造られるところである。箕子朝鮮の南限は曖昧で、京城辺りが燕の先住者の韓氏の一部が移った所とすれば、この地に逃れた箕准が韓王と名乗ったのは理解できる。また、機市長選の版図は侯にしては大きい気もする。

なお、箕子朝鮮と辰国の上に濊が書かれているのは、筆者の概観に合わない。本稿の立場からは、Wikipediaの記事は無視することは出来ないの  
で、何らかの辻褃合わせをする必要がある。1つの解決法は、矛盾する記

載を見つけ、採用しないことである。ここでは、これは採りたくない。

左下に Han Dynasty とあるのは漢帝国であろう。また、衛氏朝鮮がないことから、漢の武帝以前である。

歳が倭になったなど思いつくことはあるが、ここでは思いついただけにしておく。

Wikipedia「燕（春秋）」に次が書かれている。

燕の始祖は周建国の元勳である召公奭である。成王の時現在の北京近辺に移った。このため国名を燕といった。またこの時、現地にあった韓侯国が入れ替わりに現在の陝西省に移った。燕に残った韓の旧住民は多く韓氏を名乗った。

西周時代、燕の東方(現在の遼寧省朝陽市喀喇沁左翼自治旗)に燕の属国で箕侯という都市国家があったが、北方遊牧民に滅ぼされ、燕に亡命した住民が多かったらしい。春秋時代以降、燕の士大夫層に韓や箕を氏とする者がみられる。

この記事が箕の現れるもののうち、最も年代の古いものである。

Wikipedia「召公セキ」では

召公セキは、周朝の政治家。姓は姬、諱は奭。太公望や周公旦と並び、周建国の功臣の一人である。武王の殷朝打倒を補佐し、その功績により燕(現在の河北省北部)に封じられ、都城を薊(現在の北京)と定めた。燕には長子の克を赴任させ、自らは鎬京(現在の陝西省西安市)に留まった。

と書かれている。

周時代に中国の国の最東端にある燕の国に韓氏が、その東方に箕氏が居たことは興味あることである。次のことを思い付くが、想像の域である。

召公が燕に封じられたとき、韓の住民の一部は、陝西省に移らずに、陝西省より近い朝鮮半島に移住したことも考えられる。国を造ったかどうかは判断できない。恐らく、国を造るには到らず部族連合であったかもしれない。その後、箕氏の部族が平壤付近に移住し国を造った。韓氏は追われて南部に移住した。この箕侯は濊貊系で、滅ぼした北方遊牧民は夫餘であったかもしれない。また、Wiki 召公セキから、召公が燕に封じられたのは武帝のときである。

周の創始者武王が封じたか、西周時代、燕の東方にあった箕侯という都市国家が、北方遊牧民に滅ぼされ、燕に亡命したという2つの起源が考えられるが、西周時代に箕氏朝鮮が造られた。長は侯であった。

最後の朝鮮侯箕準(准)は馬韓(の地)に逃れ、韓王を名乗った。この(韓王)箕準の支配したところが韓国であろう。ところが、韓王は僭称であったので、正史には韓国は書かれていない。

## 衛氏朝鮮

史記では東夷伝はなく、代わりに朝鮮列伝がある。史記の時代には、遼東郡以東は衛氏朝鮮しか国は知られていなかったということであろう。

史記朝鮮列伝は次の文で始まる。

朝鮮王満者 故燕人也 自始全燕時嘗略屬真番 朝鮮 為置吏 筑鄣塞 秦滅燕 屬遼東外徼 漢興 為其遠難守 復修遼東故塞 至溟水為界 屬燕 燕王盧綰反 入匈奴 満亡命 聚黨千餘人 魑結蠻夷服而東走出塞 渡溟水 居秦故空地上下鄣 稍役屬真番 朝鮮蠻夷及故燕 齊亡命者王之 都王險

訳は殆ど理解できていない。真番が書かれているのが気にかかる。

訳に替えて、Wikipedia「衛氏朝鮮」建国の項の初めの部分を引用する。

史記によれば、前漢の高祖の時代の紀元前 202 年、燕王臧荼は反乱を起こして処刑され、代わって盧綰を燕王に封じたが、紀元前 197 年に盧綰が漢に背いて匈奴に亡命すると、劉建を形式的な燕王に封じたが実態は遼東郡を含む燕の旧領を直轄化した。その際、身の危険が迫った燕人の衛満は身なりを現地風にかえて溟水(現在の鴨緑江)を渡河、千人余りの徒党と共に朝鮮に亡命した。さっそく衛満は、我ら亡命者が朝鮮を護ると箕子朝鮮王の準王にとりいり、朝鮮西部に亡命者コロニーを造った。秦・漢の混乱期以来、この亡命者コロニーに逃げこんだ中国人は数万人にのぼっていた。さらに衛満は燕・斉・趙からの亡命者を誘い入れ、亡命者コロニーの指導者となり、朝鮮を乗っ取る機会を虎視眈々とうかがい、ある時、衛満は芝居をうった。前漢が攻めてきたと詐称して、準王を護るという口実で、王都に乗りこんだのであ

る。その時、準王は衛満に応戦したが、魏略は、「準は満と戦ったが、勝負にならなかった」と戦況を記した。芝居が現実となり、昨日の亡命者は、今日の朝鮮王となる。それは、亡命してから朝鮮王になるまで1年内外の出来事である。衛満は、中国人(燕・斉の亡命者)と原住民の連合政権を樹立、王險城(平壤)を首都として王位に就き、衛満朝鮮を建国した。

1年内外のうちに数万人の中国人が燕・斉・趙から亡命することが可能であったかなど疑問の残る所もある。

漢書西南夷兩粵朝鮮傳もほぼ同じ次の文で始まる。

朝鮮王満 燕人 自始燕時 嘗略屬真番 朝鮮 爲置吏築障 秦滅燕 屬遼東外徼 漢興 爲遠難守 復修遼東故塞 至涇水爲界 屬燕 燕王盧綰反 入匈奴 満亡命 聚党千餘人 椎結蠻夷服而東走出塞 渡涇水 居秦故空地上下障 稍役屬真番 朝鮮蠻夷及故燕 齊 亡在者王之 都王險

この文も訳は殆ど理解できていない。

秦が燕を滅ぼしたのは BC223 年であり、漢の成立したのは BC206 年である。両書にはこの後、武帝 BC141-BC87 の衛氏朝鮮討伐が書かれているが、ここでは、関連する漢書武帝紀の記事を引用しておく。

“元朔元年 BC128 東夷の葦君である南閩ら二十八万人が投降した。そこを蒼海郡とした。” 東夷葦君南閩等口二十八萬人降 為蒼海郡

三年 BC126 に蒼海郡を廃した。 罷蒼海郡

“元封二年 BC108 四月朝鮮王が遼東都尉を攻め、殺した。朝鮮を死罪とし、撃つことを命じた。” 朝鮮王攻殺遼東都尉 乃募天下死罪擊朝鮮

“六月樓船將軍の楊僕と左將軍の荀彘を派遣し、朝鮮を討たした。”

遣樓船將軍楊僕、左將軍荀彘將應募罪人擊朝鮮

“三年 BC107 夏朝鮮はその王の右渠を斬り投降した。その地を樂浪・臨屯・玄菟・真番郡とした。” 朝鮮斬其王右渠降 以其地為樂浪 臨屯 玄菟 真番郡

ピンイン 韓: hán、汗: hàn、干: gān/gàn、真番; zhēn fān、  
韓: hán、漢: hàn、居西干: jū xī gān/gàn、尼師今: ní shī jīn

漢書西南夷兩粵朝鮮傳の文に、真番が現れているが、朝鮮四郡の真番郡と関係があるのか。

この武帝による衛氏朝鮮討伐後、韓四郡が置かれたが、その詳細は書かれていない。

## 4.6. 朝鮮四郡・帯方郡

(前)漢の武帝は BC108 年に朝鮮四郡と呼ばれている樂浪・臨屯・玄菟・真番の 4 郡を朝鮮に設置した。武帝の在位期間は BC141 年から BC87 年でその没後、BC82 年に臨屯・真番の 2 郡は廃棄され、玄菟郡は西に移動された。漢書地理志と後漢書地理志共に樂浪郡と玄菟郡が載っている。



図 4.10 漢四郡

上の図 4.10 は Wikipedia「玄菟郡」のものである。この図が筆者の位置に関するイメージに一番近い。Xuantu は玄菟、Lelang は樂浪、Lintun は臨屯、Zhenfan は真番、Jin は辰であろう。Okjeo はわからない。

臨屯と真番はその南の地も担当したことが考えられる。

四郡の前に設置された遼東郡に関しては、Wikipedia「遼東郡」に、  
戦国時代、燕が北方の異民族を防ぐ目的で上谷郡・漁陽郡・右北平郡・遼西郡・遼東郡を初めて設置した。紀元前 222 年、秦が燕を滅ぼすと、引き続き燕の故地に上谷郡・漁陽郡・右北平郡・遼西郡・遼東郡が設置された。  
と書かれている。遼東郡は燕が初めて設置したが、中国王朝としては秦が初めて設置した。

武帝は初め蒼海郡を設置した。漢書武帝紀では  
“東夷の葦君の南閭が二十八萬人を率いて投降してきた。そこを蒼海郡とした。”  
東夷葦君南閭等口二十八萬人降 為蒼海郡  
であるが

“三年 BC126 蒼海郡を廃棄した。”  
罷蒼海郡  
とあるように、すぐに廃棄された。

28 万人は誇張の感がする。これが武帝に朝鮮に注意を向けさせたのか。何もせずに投降することは普通あり得ない。衛氏朝鮮が弱まったことと、漢による働きかけはあったはず。衛氏討伐の前哨か。

“元朔二年 BC127 匈奴が上谷郡と漁陽郡に侵入し、千餘人の民を殺略した。衛青將軍を派遣した。李息は雲中より、高闕と西の符離に至り、數千の首級を得た。河南地を治め、朔方郡と五原郡を置いた。”

匈奴入上谷 漁陽 殺略吏民千餘人 遣將軍衛青 李息出雲中 至高闕 遂西至符離  
獲首虜數千級 收河南地 置朔方 五原郡

とある。この翌年に蒼海郡を廃棄したことになる。

蒼海郡の設置は最大の懸念である匈奴対策として側面を固めるためではなかったか。設置後 2 年で廃棄されたのは、遼東郡で十分とされたのではないかと考える。

“元封三年 BC108 朝鮮がその王右渠を斬殺し投降してきた。その地を樂浪・臨屯・玄菟・真番郡とした。”

朝鮮斬其王右渠降 以其地為樂浪 臨屯 玄菟 真番郡

衛氏朝鮮の地に 4 つの郡を置いたと書かれている。武帝は BC87 年に亡くなった。この後、漢四郡の見直しが行われたようである。

北史では

“元封四年 BC107 武帝が朝鮮を滅ぼしたとき、高句麗を県とし、玄菟郡の下に置いた。”  
武帝滅朝鮮 以高句驪為縣 使屬玄菟  
と書かれている。

漢書地理志に書かれている玄菟郡と樂浪郡のデータは次である。

玄菟郡 戸四萬五千六 口二十二萬一千八百四十五 縣三 高句驪 上殷台 西蓋馬

樂浪郡 戸六萬二千八百一十二 口四十萬六千七百四十八 縣二十五 朝鮮 儼邯 涇水  
含資 黏蟬 遂成 增地 帶方 駟望 海冥 列口 長岑 屯有 昭明 鏤方 提奚 渾彌 吞列  
東儗 不而 蠶台 華麗 邪頭味 前莫 夫租

臨屯郡と真番郡は書かれていない。玄菟郡に西蓋馬があるが、東蓋馬はないのか。後漢書では、玄菟郡が6県、樂浪郡が18県となっている。

Wiki「樂浪郡」では

紀元前108年から西暦313年まで存在した。樂浪郡の住民は王氏が多く韓氏これに次ぎ、この二氏でかなりの率を占めていた。郡治所は朝鮮県(衛氏朝鮮の王險城、平壤)で、南部には南部都尉が置かれた。

前82年(始元5年)に廃止された臨屯郡北部の6県と玄菟郡の1県が編入された。紀元前75年、単于大嶺の東側の部分に樂浪東部都尉を置き、不耐城を治所として嶺東七県(東儗県、不耐県、蚕台県、華麗県、耶頭味県、前莫県、夫租県)に分けて治めさせ、官吏は濊(東濊)の民が務めた。

王莽による新朝では、樂鮮郡と改称された。

樂浪郡の郡治は箕氏朝鮮と続く衛氏朝鮮の王都を継続したと思われる。したがって、始めから郡治としての設備を構築することは容易であったはずである。

元封三年の段階では、朝鮮の拠点としての樂浪郡郡治の設定と、大まか

に四郡の設置を行った。この時点では朝鮮半島の南部の状況は殆ど把握していなかったのではなかったか。

武帝の次の皇帝である昭帝の即位が BC86 年である。この時点では、朝鮮半島の状況が把握できたことから、四郡の見直しが BC82 始元五年に行われ、南部の維持はメリットが無いと判断されたのかと考える。

東夷に対しては、遼東郡の東から北に玄菟郡を置き、高句麗とその北・東にいる東夷を担当させ、楽浪郡に朝鮮半島の東夷を担当させる体制ができ、後漢末までこの体制が続いた。

Wikipedia「玄菟郡」では

第一玄菟郡： 前 107 年(元封 4 年)に遼東郡の東・楽浪郡の北に隣接する地に設置され、幽州に属した。郡治は夫租県に置かれた。郡内の県は、夫租、高句驪、西蓋馬、上殷台の 4 県しかわからない。当時の戸数は 45,006 戸、人口は 221,845 人。当初の領域は遼東郡北端から出発して中朝国境地帯山岳部(吉林省東部と北朝鮮慈江道・两江道に跨がる地域)から咸鏡道を通り日本海に達する回廊状に県城が並んだものと推察してこれを玄菟回廊と呼ぶ学者もいる。

前 82 年(始元 5 年)に漢四郡のうち真番郡・臨屯郡が廃止されたとき、廃止をまぬがれたものの、夫租県が楽浪郡に編入された。玄菟郡の郡治は夫租県から変わって高句驪県(現在の吉林省集安市通溝郷)に移された。これで、玄菟郡領域のうち日本海沿岸部(咸鏡南北道)は夫租県とその周辺一帯を除いて大部分が放棄されたことにな

る。

第二玄菟郡：紀元前 75 年(元鳳 6 年)になると、玄菟郡は西へ縮小移転された。郡治の高句麗県は現在の遼寧省撫順市内の東部、新賓満族自治県永陵鎮老城村(昔の興京)付近へ移され、元の場所には高句麗侯(後の高句麗王国の前身)が冊封された。

新の始建国 4 年(12 年)、王莽が高句麗を下句麗へ改名した為に、高句麗が玄菟郡を侵犯するようになる。後漢が成立すると光武帝建武 6 年 30 に楽浪郡東部都尉は廃止となり、嶺東 7 県の直接統治は放棄され、それぞれ県侯として冊封して独立させた(その一例として夫租歳君・夫租長の銀印などが発見されている。3 世紀の沃沮族の起源)。建武 8 年(32 年)に高句麗侯は再び冊封体制下へ組み込まれ、侯から王へ昇格された。

第三玄菟郡：107 年(永初元年)になると、遼東郡北部都尉の管轄区を遼東郡から切り離して新しく玄菟郡とし、遼東郡に隣接していた旧玄菟郡を廃止、高句麗による領有を許可した。郡治の高句麗県は現在の瀋陽(瀋陽と撫順の間からやや瀋陽寄り)に遷された。諸県のうち、高句麗県・上殷台県・西蓋馬県の 3 県は、元々は玄菟郡にあった諸県の県名を移動させてきたものの残滓である。戸数は 4 万 5006、口数は 22 万 1845 人。

高句麗との関係：高句麗王国を構成する 5 部族の前身が玄菟郡の 5 県の県侯だったとすれば、32 年(建武 8 年)に王に冊封された段階で 5 部族の連合体としての王国が成立したともみえる。高句麗王国の王都丸都城は玄菟城が訛ったものである。後世に編纂された三国史記に記載された伝承では、高句麗は前 37 年に建国されたことに

なっており、これは第二玄菟郡の期間内にあたるため、中国側から高句麗侯と呼ばれた勢力が大雑把にほぼその頃の建国であることは信憑性があると考えられている。

BC75 年に冊封された高句麗侯のちの高句麗国との関係は不明である。侯であるから県レベルの勢力であろう。この時点では漢が皇族・功臣以外を王としなかった可能性もある。

この高句麗縣にいた夫餘・濊・貊系の民族が高句麗国を造ったと考えるのは自然であるが、次の三国史記の記事から検討を要する。

“瑠璃明王三十三年 13 王は烏伊・摩離に命じて、兵二万を率いて西の梁貊を討たせこれを滅ぼした。さらに兵を進め高句麗縣を襲い収めた。高句麗縣は玄菟群に属している。”

王命烏伊・摩離 領兵二萬 西伐梁貊 滅其國 進兵襲取漢高句麗縣

この高句麗縣は移転後の第2次高句麗縣と考えられるが、これらは高句麗を扱うときの課題としておく。

ikipedia「楽浪郡」では

郡治所は朝鮮縣(衛氏朝鮮の王險城、今の平壤)に置かれ、郡の南部には南部都尉が置かれていた。

前82年(始元5年)には真番・臨屯が廃止され、臨屯郡北部の6縣と玄菟郡の1縣が楽浪郡に編入された。これを嶺東七縣(日本海側)といい嶺東7縣を管轄する軍事

組織として東部都尉が置かれた。

後漢光武帝が中国統一事業の過程で 30 年には楽浪郡を接收している。その年(30 年)のうちに後漢は嶺東 7 県を廃止して、原住民の濊人を県侯に任命して独立させている。313 年には高句麗に滅ぼされ、後に高句麗は楽浪郡の跡地に遷都した。楽浪・帯方の土着漢人達は高句麗・百済の支配下に入った。

真番郡・臨屯郡は設置と廃棄以外の記事は正史には見当たらない。イメージとしては、馬韓が真番郡辰韓が臨屯郡であるが根拠はない。もう少し北で現在の北朝鮮の中かもしれない。

Wikipedia「真番郡」では

15 県からなり、郡治が置かれた雲県の位置は長安を去ること 7,640 里という。管轄する領域の範囲は諸説があって確定していない。前 82 年(始元 5 年)に真番郡は廃止された。

Wikipedia「臨屯郡」では

15 県からなり、その境域はほぼ現在の江原道に該当すると考えられている。郡治の置かれた東曠県(現在の韓国江原道江陵市)は長安を去ること 6,138 里という。前 82 年に 15 県中の 9 県は廃止となり、残りの 6 県と玄菟郡の夫租県を合わせた 7 県は楽浪郡に編入され、臨屯郡は消滅した。

Wikipedia「帯方郡」では

後漢の末、中平6年18に中国東北部の遼東太守となった公孫度は、後漢の放棄した朝鮮半島へ進出、楽浪郡を支配下に置いた。その後を継いだ嫡子・公孫康は、楽浪郡18城の南半、屯有県(現・黄海北道黄州か)以南を割いて帯方郡を分置した。その正確な時期は早ければ建安9年204頃かともされる。「是より後、倭・韓遂に帯方に属す」という朝鮮半島南半の統治体制を築く。公孫康はほどなく魏の曹操に恭順し、その推薦によって後漢の献帝から左將軍・襄平侯に任ぜられ、帯方郡も後漢の郡として追認された。

公孫康の死後、その子・公孫淵が幼いために公孫康の実弟・公孫恭が後を継ぎ、後漢の献帝から禅譲を受けた魏朝の文帝(曹操の子・曹丕)により、車騎將軍・襄平侯に封じられた。しかし、太和2年22成長した公孫康の子の公孫淵は叔父・公孫恭の位を奪い取り、魏の曹叡(明帝)からの承認も取りつけて揚烈將軍・遼東太守に任ぜられる。公孫淵は、祖父以上に自立志向が強く、景初元年237反旗を翻して独立を宣言。遼東の襄平城で燕王を自称するにいたる。帯方郡も楽浪郡もそのまま燕に属した。

翌年238魏の太尉・司馬懿の率いる四万の兵によって襄平城を囲まれ、公孫淵とその子・公孫脩は滅びる。帯方郡はこれにより魏の直轄地となる。

泰始元年265に魏の重臣であった司馬炎(懿の孫、後の晋の武帝)が魏の曹奂(元帝)から禅譲を受けて晋朝を興した。この時代、帯方郡に属する県は、帯方・列口・南新・長岑、提奚、含資、海冥の7県であった。

建興元年313遼東へ進出した高句麗が南下して楽浪郡を占領すると、朝鮮半島南

半に孤立した帯方郡は晋の手を離れ情報も途絶した。元の帯方郡や楽浪郡南部に残された漢人の政権や都市は、東晋を奉じて 5 世紀初頭までの存続が確認されているが、5 世紀前半には百済によって征服され、5 世紀後半に入ると南下した高句麗が百済を駆逐して支配下へ置いた。

帯方郡衙の比定地については諸説が挙げられているが、このうちの、黄海北道鳳山郡沙里院にある唐土城を帯方郡治に比定する説を採りたい。

## おわりに

前稿の「正史を彷徨う」第五章の体裁を変えたものである。

当面の目標である後漢書と三国志に書かれている倭に関する記述を理解するため、中国の王朝と東夷に関して基本と思われることと興味あることを拾い集めた。

中国に関しては、裴李崗文化～仰韶文化などと殷・周などの古代帝国との関係である。これに関して1つ思いついた。インドにアーリア系の民族が移住し、ガンジス川の北部に国家を造ったように、黄河中流域にも西方からの民族の移住があったのではないかということである。中国の場合は五月雨式なもの可能性がある。漢字が何時できたのかは解明できているかもしれないが、筆者は今のところ把握していない。

図 4.2 と図 4.3 は閉鎖になった「Yahoo!ジオシティーズ、中国東アジア歴史地図」にあった BC1100 年、BC400 年から部分的に写したものである。